

# 教育研究業績

2023年5月1日

氏名 **鈴木 政浩**

研究分野	学位
英語科教育法	教育学修士

研究内容のキーワード

英語授業学研究 (Faculty Development)、e-learning、音読 (音声) 指導

## 教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項

事 項	年 月 日	概 要
1、教育方法の実践例		
洋画を題材とした背景情報の収集—インターネットでの情報収集から冊子づくり	2002年4月 ～2002年7月	洋画の視聴とtranscriptの学習を経て、その背景についてインターネットやフィールドワークによる情報収集に取り組みました。調査内容は冊子にまとめ、学内にて配布 (映画英語教育学会第5回大会にて発表)。
洋楽と洋画を利用した英文音読指導	2002年10月 ～2002年12月	音読活動を支える一側面として、教材の内容が挙げられる。洋楽の歌詞や洋画のtranscriptから、学生が感動するものを取り上げ、音読や暗唱用教材として授業を進めた。学生にとっては、教材を選ぶための新しい視点ができたとの評価がみられた。
中学・高校・大学を貫く音読指導 (洋画・洋楽を使って)	2003年5月 ～2003年7月	音読指導の現状を、2002年に実施した全国アンケート調査から分析。これにもとづいて授業を構成した。すでに中学1年の2学期の時点で音読が軽視される傾向があったことから、学生が興味を示す教材を使いながら、丁寧な音読指導を進めた。学生からは、英語に対する抵抗感がなくなり、英語学習の再スタートを切ることができたという感想が多数寄せられた。
洋画を活用した英米文学への取組	2003年4月 ～2005年1月	文学部英米文学科の学生でも、原典を読み進める面白さを味わう機会はずしも多くないのが実情である。この授業実践は2003年4月から2004年1月まで担当したReading1-A、1-B (英米文学) の取り組みである。William Shakespeare's Romeo + Juliet (Leonardo DiCaprio主演) の視聴、ROMEO + JULIET (スクリーンプレイ社刊) を使ったTranscriptの朗読に取り組んだ。その後、インターネットを活用し、洋画化された英米文学を各自選んで視聴。その後、翻訳書と原典を使いながらレポートを作成させた。レポート内容は、原典のあらすじ、作者のプロフィール、映画と原典の違いをまとめた上で、自分のお気に入りの名場面を選び翻訳する課題であった。原典を音読することの心地よさを体験し、英米文学講読に対する興味関心が高まり、原稿を校正する過程で、クラスメートの書いた英文や日本語原稿を読むことの楽しさに気づいたという感想が得られた (映画英語教育学会全国大会にて発表)。
パソコン・DVDを活用した教材づくり	2003年10月 ～2003年1月	DVDをリッピングし、そのデータを加工して英文朗読用教材として編集した。学生の感想を分析した結果、英語学習の苦手意識を克服するという点で効果がみられた。
英文の音読を活かす授業	2003年10月 ～2003年1月	生の英語を教材とし、英文の速度を調整しながら取り組んだ。洋画のサウンドトラックをBGMとして流しながら英文を朗読した。その音声を録音し、授業で視聴した。録音という最終目標を明示し、録音した音声をCDにして配布するなど、productsを残す活動により、学習の集中度を高めと学習動機を維持させる点で効果がみられた (山梨県高等学校教育会・教育研究会にて発表)。
理論的背景と学習者の実情をふまえた語彙指導	2004年4月 ～2004年8月	高校生対象のアンケート調査を分析し、付随的学習 (incidental learning) の可能性を授業で探った。アンケート調査によれば、学習者の語彙学習の方路に対する知識はきわめて貧弱であり、語彙を学ぶ上で採用する方路の選択範囲が狭いことがわかった。しかし、学んだ語彙を授業外での教材 (テレビで見る海外のドラマや洋画等) で再認しようとする傾向がみられた。こうした分析にもとづき、コロケーションや接頭辞・接尾辞を活用した語彙学習、英文表現に既習の語彙を活用するなどの方路指導を通じ、学生の語彙学習に対する視野を広げることにつなげた (ELEC同友会英語教育学会第10回記念研究大会にて発表)。
英文音読におけるWarm-up Effectを活用したリスニングへの取組	2005年4月 ～2005年8月	英文を音読した後にリスニングに取り組むことで、テストのスコアが上がるという研究成果にもとづき、リスニングの前に既習教材の音読に取り組みました。音読をする場合のスコアとそうでない場合のスコアには有意な差がみられた。この結果を伝え、学生に音読の効果を実際に体験させることに役立てた (LET (外国語教育メディア学会) 全国大会にて発表)。
2、作成した教科書、教材		
3、当該教員の教育上の能力に関する大学の評価		
4、実務の経験を有する者についての特記事項		
5、その他		

## 職 務 上 の 実 績 入 力 関 する 事 項

事 項	年 月 日	概 要
1、資格・免許	1985年3月 1997年3月1日 2018年8月1日	中学校教諭一級普通免許・高等学校教諭二級普通免許取得 高等学校教諭専修免許取得 成城心理文化学院認定講師 (心理士)
2、特許		
3、その他		
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月
(著 書)		発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名
		概 要

1	英文法の授業11のアプローチ	共著	1995年9月20日	三友社出版	ストレス・イントネーション・リズムなどを身につけるために映画はすぐれた教材となる。また感動的な内容を持つ映画は学習者を強く引きつける。ここでは基本的な語彙や文法事項を多く含む、感動的な映画E.T.を取り上げた。簡単な英語で話し言葉によるコミュニケーションは成立すること、状況に応じて同じ台詞でもその意味するところが変化することを学習者と考える指導事例を紹介した。執筆担当は、第9章第1部「映画やアニメで教える『E.T.』でコミュニケーションを学ぼう」pp.146～153。共著者：浅川和也、阿世賀寛行、荒木好枝、飯野厚、石井清、石井輝、上原重一、大栗健二、大谷美枝子、奥西知子、奥西正史、小田尚子、片岡英明、川戸賢一、神津毅夫、嶋津訓一、杉本良雄、鈴木政造、高橋佳子、瀧口優、田中紀夫、棚谷孝子、谷浦健司、田村泰、中江哲子、二階堂次男、花田禮司、林野滋樹、松原桂、森高省治、山村陽子、横山寛、米澤清恵(A5版 全207頁)。
2	グローバル英語教育の手法と展開	共著	1996年1月20日	三友社出版	国際的な情報をいち早く得るため、英文雑誌を読むスキルを身につける指導をし、記事に掲載されている大統領選挙をシミュレートする中学校で実施した実践事例を紹介した。基礎的な文法事項でスクリプトを作成し、学習者同士が互いのスピーチを評価し合うことにより価値観の交流が進み、心理的な交流が実現した。この取組は発表者にとっては英語プレゼンテーション、聞く側にとっては要点や概要を的確にまとめる練習となることを示した。執筆担当：第4章「子どもの権利条約と大統領選挙を題材にして」p.54～p.74。共著者：浅川和也、飯野厚、岡田順子、Kip Cates、木村みどり、笹田巖、鈴木政造、中鉢恵一、福永保代、藤田真理子、米沢修一(A5版 全215頁)。
3	高等教育における英語授業の研究－授業実践事例を中心に	共著	2007年1月15日	松柏社	日本全国から高等教育における実践事例を公募。審査の結果107の授業実践事例を掲載した。これら実践事例の分析考察と、現在の高等教育を取り巻く現状を概観し、大学教育における授業のあり方について提言を行った。審査を通過した授業実践事例は、4技能やメディア活用、学習者に関するカテゴリー等に分類し、詳細な授業指導案を掲載した。これらの授業実践事例を、授業の種類・キーワード・省察の視点から分析するとともに、望ましい授業や教員に求められる資質・能力がどのようなものであるかなどに関して提案した。その他大学で公表されているカリキュラムの実態や参考文献を資料として掲載し、いくつかの授業について、実際の授業場面をDVDに収録し添付した。編集担当は、編集事務局長として書籍全体の編集を統括するとともに、版下の作成をした。実践事例107の概要整理とその区分、を行った上で、目次・索引の編集を行った。執筆担当は、キーワード分析にみる実践の特徴分析と提言 p.261～263。共著者：森住衛、山岸信義、窪田光男、小栗裕子、東郷多津、鈴木千鶴子、神保尚武、野田哲雄、鐘々江弓子、加藤佐和子、山本成代、中岡典子、鈴木政造、青柳明、仲谷都、池野修、小宮富子、佐々木智之、西堀ゆり、野村和宏、成田一、村上裕美、笹井悦子、川越栄子、馬場千秋、林千代、小嶋英夫、奥平文子、渡辺敦子(B5版 340ページ)。
4	英語教育学大系第1巻 大学英語教育学—その方向性と諸分野	共著	2010年2月1日	大修館書店	大学英語教育学会創立50周年を記念した刊行事業である、英語教育学大系全13巻のうちの第1巻。英語教育の目的論、大学英語教育学の方向性、初等中等教育との連携、関連領域との連携、言語政策と大学英語教育、英語教育の国際化、情報化の実態と課題、産学連携、高等教育の大衆化と大学英語教育など大学英語教育をめぐる幅広い分野の知見を概観した。さらに、2巻から13巻までの概要を網羅し、その中から大学英語教育全般に関わる領域について概観した。執筆担当部分は、第11章 英語授業デザイン共著者：山岸信義・高橋貞雄・鈴木政造 (B5版286頁)
5	英語教育学大系第11巻 英語授業デザイン	共編著	2010年7月10日	大修館書店	本書は、『高等教育における英語授業の研究－授業実践事例を中心に』を引き継ぎ、教室内のコミュニケーションを、授業者と学習者、学習者同士の関係からとらえ直す指導法と実践について提起している。前半には、コミュニケーション・アプローチ、Task-based Approach、Content-based Approach、協同学習、多重知能理論など、関連諸分野の歴史と可能性を探り、パフォーマンス学など新しい分野の知見などにも目を向けた。後半ではこうした理論的背景をもとにそれぞれの知見を授業に適用するための実践例を紹介した。編集担当は、書籍全体執筆担当は、第4章 コミュニカティブ・アプローチその後：日本の英語教育と学習者に必要な授業デザイン(28～38頁)、12章 個を生かすMultiple Intelligencesの視点からのアプローチ(116～136頁)、第18章 大学英語教育への応用(特に授業において)(236～246頁)、補論 英文サマリー(320～330頁)。共編著者：山岸信義、高橋貞雄、鈴木政造(A5版 340頁)

6	映画英語授業デザイン集	共著	2012年5月18日	スクリーンプレイ	小中高大学における映画を使った英語授業の展開例および、映画の背景的知識をまとめた実践事例集。授業の展開を提示し、取組後学習者がどのような感想を持ったかなどをまとめた。執筆担当部分は、「ICレコーダーを活用した音読指導～DRAGONBALL EVOLUTION～」(70～73頁)共著者:阿久津仁史、大井龍、大槻敦子、小野寺和子、嘉来純一、カレイラ松崎順子、小瀬百合子、佐藤みか子、清水純子、東海林康彦、鈴木政造、堀恵美子、メイスみよ子、守屋昌彦、吉田雅之、吉牟田聡美、渡辺信(A5版176頁)
7	みんなの英語音読入門編	監修	2012年7月7日	アスク出版	韓国で発売された英語音読の独習書3巻本の第1巻を日本人学習者向けに書き直した。使用した英文以外はすべて書き下ろした。解説編では音読が外国語学習にどのように寄与するのかを脳科学の知見をふまえて解説し、リスニングやリーディング能力を高めると言われる理由を説明した。英文を音読する際のアドバイスや、フレーズリピーティング、オーバーラッピング、シャドーイングの活動とその練習方法を解説し読者への便宜を図った(B6版160頁)。
8	みんなの英語音読 世界の童話編	監修	2014年4月21日	アスク出版	韓国で発売された英語音読の独習書3巻本の第2巻を日本人学習者向けに書き直した。使用した英文以外はすべて書き下ろした。全体の構成は『入門編』(第1巻)を踏襲した。その上でプロンディーシャドーイングとコンテンツシャドーイングを新たに導入した。前者は発音を中心としたシャドーイング、後者は内容理解を重視したシャドーイングである。基礎的な音読練習の後、並行してこれらのシャドーイングに取り組むことがより音読の効果を上げるという視点から全体の編集・執筆を進めた(B6版160頁)。
8	みんなの英語音読 世界の小説編	監修	2014年4月21日	アスク出版	韓国で発売された英語音読の独習書3巻本の完結編を日本人学習者向けに書き直した。全体の構成は『入門編』を踏襲し、使用した英文以外はすべて書き下ろした。『入門編』『基礎編』の内容をふまえ、比較的まとまった量の英文を音読教材として提示し、音読の基礎的練習からシャドーイングまでのプロセスを総復習するように配慮した(B6版160頁)。
(学術論文:雑誌論文)					
1	おとなの学力観の転換を(<低学力>は存在しない)	単著	1996年4月15日	『新英語教育』第321号三友社出版(12～14頁)	語彙が少ない、三人称単数現在の-sが理解できないなど具体的なことがらに対する習熟を指して学力問題を論議することが一般的となっている。こうした到達目標を基準とした学力に対して、好奇心・意欲・自尊心を学力の基礎ととらえた。また、学習者にとって未定着な部分ではなく、既知の情報をもとに授業を構成することが自尊心の回復となり学習を促進することを過去の授業実践の事例から指摘した。
2	A Theoretical and Practical Study of Well-arranged Language Skill Instruction Before the Communication-oriented Classroom Settings. (修士論文)	単著	1997年3月25日	埼玉大学	コミュニケーション重視が主流となり、4技能の統合の重要性を指摘する研究が増えた。外国語学習の入門期の時期には技能統合の実をあげるためには技能相互が深部でどのように相互作用をもっているかを教師が把握する必要がある。そこで技能連動という概念を提起しながらリスニングがリーディングに及ぼす影響について考察した。リーディングは各自で取り組む場合、個々の学習者のリーディング速度に依存する。しかし音声を用いることで読速度が向上する。こうした視点から中学生を対象に英字新聞を教材化するための指導のポイント(音声教材を併用し、音声を聞きながらリーディングに取り組むことで読む速度が上がること、読む速度が上がると、要点のみを頭にとどめることから、比較的難しい英文にも取り組めること)をまとめた。こうした指導により、最終的にインプットの総量が上がる可能性を示した。
3	Self-esteemを基礎とした英語教授法のあり方についての考察—Humanistic Approachの手法を英語授業に	単著	1997年12月1日	『じゅうの森』第8号私立自由の森学園(96～127頁)	言語心理学の先行研究では学習者の自尊感情が学習動機を支え、これが学力の基礎を構成するという分析がある。海外には人と人とお互いの肯定的な部分に関心を持ち、互いの自尊感情を高めるコミュニケーション活動を推奨するHumanistic Approachがある。この指導事例を紹介するとともに日本の英語教育に導入する具体的な手法と実践例、実践にもとづく学習者の反応などを提示した。
4	中学・高校を見通した指導のあり方について—移行期を意識した授業の取り組み	単著	1997年12月15日	『新英語教育』第339号三友社出版(17～19頁)	中央教育審議会が公立中高一貫教育を提起する時代となった。ところが、中高の現場では中学校の英語と高校の英語の移行期を意識した実践例はあまり多くみられない。中学と高校を併設する私立高校1年生を対象とし、1年間の授業実践をまとめた。ある単語に綴り字を付け足すことにより別の単語を覚える語彙指導、5文型ではなく3文型にして解説することで学習にかかる抵抗感や負荷を減らす試みを紹介した。

5 生徒・教師の目から見たALT制度—12年目を迎えるALT制度が提起するもの	単著	1998年10月15日	『新英語教育』第351号三友社出版(17～25頁)	ALT制度が10年目を迎えるにあたり、中学・高校の教師と生徒を対象に実施したアンケート調査を分析した。この中から、ALT制度やティーム・ティーチングの現状と課題を提起した。全体的な傾向としては、ALTとの授業は楽しく、好意的に受け入れられている。しかし英語の学力が定着したという実感は低く、年齢が高くなるほどその傾向が強いことがわかった。その原因として、日常の授業とALTとの授業に関連がないことが多いことを指摘した。ここからティーム・ティーチングの効果を促進するためには、日常の授業では学んだことを使ってみるという授業形態を取ることが必要であるという提案を行った。さらにリーディングやライティングなどの活動とティーム・ティーチングを連動させる授業事例の開発が重要であることを指摘した。
6 価値観の違いをきわだたせる映画を使ったライティング指導	単著	1998年12月25日	『映画英語教育研究』第4号映画英語教育学会(47～57頁)(査読付論文)	教材の持つ深い内容は外国語学習を促進する教材になりうる。この観点から映画を授業で扱うことの意義を指摘した。大学生を対象とした集中講義で、映画を視聴した後に設定したテーマに応じて英文のドラフトを作成させ、それをもとに英語で感想を述べ合う。ここでこのやり取りをふまえて感想を英語で書くライティングの活動の効果を検証した。授業実施前にエッセーライティングに取り組み、このエッセーと授業後大学生が書いた英文を分析し、その変化について考察を加えた。1文に含まれる語数、英文の総数、英文全体に含まれる語彙数、総語数、英文構造の複雑さに関して飛躍的な改善が確認できた。
7 逐語的理解をのりこえるリーディング指導—中学生に英字新聞を教材化する試み	単著	1999年3月25日	『武蔵野英米文学』第31号武蔵野英米文学会(145～156頁)	近年実際のコミュニケーションの場面を重視した外国語学習が推奨されている。この考え方の背景には技能統合という考え方があり、また言語の4技能には下位技能が存在し、技能を統合した指導を効果的に進めるには、下位技能相互がどのような連動性があるかを分析する必要がある。本論文では、英語のリーディングとリスニングにおける技能の連動性に着目した。英字新聞を中学生に教材化し、聞きながら読む(Reading while listening)活動を通し、自分の知っている語句レベルで英字新聞の概要を把握する授業の手順と教材作成上の工夫を紹介した。
8 教材のメッセージが深める自己表現—社会的な問題に視野を広げる教材で深める自己表現指導	単著	1999年8月15日	『新英語教育』第362号三友社出版(20～23頁)	映画はすぐれた外国語教育の教材として市民権を得つつある。特に映画の持つメッセージは、学習動機を促進することが知られている。このような観点から、大学生を対象とした映画を使ったライティング授業のポイントを整理した。ライティングの活動を促進するためには、メッセージが明確で、かつ多様な学習者の価値観を引き出すものを選ぶこと、さらに英語・日本語によるディスカッションをライティングの授業に導入することにより、価値観の多様性がさらに浮き彫りになること、こうした観点をふまえることで、ライティングの活動が活性化することを実際の授業事例をもとにまとめた。
9 授業力アップのための映像・ビデオリスト	単著	2000年5月15日	『新英語教育』第371号三友社出版(22～24頁)	マルチメディアの発達により、外国語学習や指導に活用できる映像教材は多種多様となっている(映画・ドキュメンタリー・衛星放送・ケーブルテレビ・放送局と連動したインターネットのホームページなど)。他方外国語学習に有効なメディアやリソースを見つけるために費やす労力は膨大なものとなり、情報の選択眼が求められる。こうしたニーズに応え、外国語学習だけでなく教員の自己研修にも役立つ映像教材についてリストアップするとともに、外国語学習の分野ごとに役立つ映像教材を整理し、その活用法について言及した。
10 実践的コミュニケーションを乗り越える	単著	2000年7月15日	『新英語教育』第373号三友社出版(17～20頁)	これまでのオーラル・コミュニケーションでは、information gapに着目した活動事例が多く紹介されてきた。これに対し第2言語習得理論や英語科教育法の分野では、value gapの重要性も強調されている。学習者の熟達度や年齢を考慮すると、information gapの活動をvalue gapへと発展させるオーラル・コミュニケーションの手法を追求することが必要となる。また、value gapを有効にするには、仮想場面よりも現実の場面設定が有効であり、学習者同士が共有できる場面をもとに活動に取り組むことが重要である。このような観点から、場面中心のコミュニケーションを重視し、学習者の現実に即した生活場面を設定させながらダイアログづくりに取り組むことで音声による自己表現の取組をまとめた。

11 小学校の先生方は英語教育導入をどう受け止めているか—埼玉県内アンケート調査とその分析—	単著	2001年5月1日	『生活教育』第630号日本生活教育連盟(14～21頁) 総合的な学習の時間の扱いについては、さまざまな意見がある。小学校の段階から英語教育を導入すべきであるとする推進派と、母語を中心とした基礎的な学力形成が優先するとする否定派の意見がある中、保護者の8割以上は小学校における英語教育を歓迎しているという調査報告もある。本論文ではこうした議論に関して小学校の教諭がどのような受け止め方をしていくかを、埼玉県内約150校の小学校教諭を対象とした独自調査を行い、小学校における英語教育の実施状況・内容などについて集約した。アンケート結果から、指導にあたる教員が不足していること、中学校における言語活動をそのまま導入していること、環境整備の遅れなどについて小学校の現場では多くの不安をかかえていることなどの実状をまとめた。
12 何度も読みたくなるこの表現—映画の名セリフを音読しよう	単著	2001年9月15日	『新英語教育』第387号三友社出版(15～17頁) 音読は外国語学習・習得に効果的であるとの主張がある。その指導過程の最後の段階として表現読みがあるが、表現読みを効果的に進めるためには教材そのものの内容が大きな役割を果たす。こうした視点から洋画の台詞の中から表現読みを促進する格調高く感動的なものを選び授業で取り上げた。その中でも特に学習者の関心を引いたものを選び、洋画の概要と台詞の解説をまとめた。
13 大学生の音読学習における速度と回数が学習者の英語学力定着および情意面におよぼす効果についての実証的研究	単著	2002年2月25日	『武蔵野英米文学』第34号武蔵野英米文学会(81～99頁) 英語学力を向上させるための音読活動においては、音読の回数や速度、リスニング能力向上や内容理解の促進などとの関連を考えながら指導することが重要である。本論文では、音読回数・音読速度・空所補充問題の得点という3つの変数の間にどのような関係があるのかを分析した。測定した3つの変数を量的に分析し、授業後記述回答で得た学生の感想で裏付けを行った。その結果、外国語の到達度が高い学習者に関しては、できるだけ早い時期に音読速度を上げさせ、一定時間内にできるだけ多く音読させることでリスニングへの抵抗感が少なくなることがわかった。また到達度の低い学習者に対しても音読速度を上げることは必要であるが、速度に集中すると内容理解がおろそかになるため、速度よりも回数を多く音読させることが有効であると提案した。
14 埼玉の外国語(英語)教育	共著	2002年3月1日	さいたま教育文化研究所外国語教育研究会(4～25頁) 2001年9月から11月にかけて、埼玉県内の小学校教員を対象に行ったアンケート調査の結果をまとめ考察を加えた。実施期間は2001年9月から11月であった。177の小学校から回答を得、小学校ではどの程度外国語(英語)の授業や学習の機会を導入しているのか、外国語(英語)学習をめぐる条件整備の実状等について調査を行った。2001年5月の調査分析と比べ、児童が活発に学習に取り組む姿が見られるようになり、小学校教員は英語学習をより好意的に受け入れるようになっていること、英語や外国人に対する抵抗感を減らという点に意義を見出していることがわかった。他方、英語学習を取り巻く環境整備や、学力の定着に関しては疑問視する傾向が依然強く見られた。執筆担当分:第1章第1節「小学校における外国語(主として英語)教育導入に関する実態調査」。共著者:鈴木政造、菊地英、植野由希子、田中渡、柳沢民雄、小池奈津夫。
15 音読指導再考	共著	2003年2月15日	『新英語教育』第404号三友社出版(7～9頁)。 音読指導の実態・目的・指導過程・課題についてまとめた。まず2002年に実施した音読の意義に関する質問紙調査の結果をまとめた。対象者は一都6県の中高大学生と、中高大学の教員であった。音読の重要性は教員・生徒ともに認めているが、音読は学習者任せとなっており、具体的な指導方法や効果の測定がなされていないという傾向が見られた。次に英語技能を高める上での音読の役割、母語における音読の役割と外国語学習環境における音読の位置づけの違いに言及した。最後に中学から高校にいたるまでの具体的な指導過程を整理するとともに、今後焦点を当てるべき音読の新しい側面(授業者の英文読み聞かせ等)の重要性について提起を行った。執筆担当分:アンケート調査のまとめと分析、音読の指導過程を中心に執筆し、共著者の原稿のとりまとめを行った。共著者:阿久津仁史、飯野厚、清水由紀子、鈴木政造、間中和歌江。
16 音読指導の今日的課題—個別指導の観点から—	単著	2003年2月25日	『武蔵野英米文学』第36号武蔵野英米文学会(99～121頁) 海外におけるリーディングの研究で音読が必要とされて来た経過、国内で音読が重視されるに至った経過を振り返った。次に、2002年に行った音読指導についての全国アンケート調査の結果を元に、音読指導をめぐる中高大のとらえ方をまとめた。音読指導が日本の英語教育で重要な位置を占めるという立場に立ち、これまでに提唱された音読指導の種類、評価の視点、目的・目標・ゴールの明確化という指導上の注意点を提起した。

17 「使える英語」時代の学校英語	単著	2003年6月25日	『旺文社 Interactive』Vol. 16 (10～16頁)	「使える英語」が求められる中、現代の高校英語について、中学や大学との接点を含めて考える座談会のまとめ。「使える英語」をどのように定義するのか、ALTとの協力体制や役割、高校英語の授業における質と量の両立などに加え、生徒の学習動機を高める指導を通じて、英語の基礎基本を養うことが「使える英語」能力の土台となるという提案を行った。
18 Reading(メディア英語)の授業開き—音読の速度を上げることの効果についての考察—	単著	2004年2月25日	『武蔵野大学文学部紀要』第5号武蔵野大学 (33～43頁)	洋楽、CNNのTranscriptや音声を活用した音読中心の授業の指導過程をまとめた。音読の速度を上げること、大学生が短時間の間に英語音声聞き取れるようになること実感する繰り返し音読の指導過程をまとめた。リスニングには音声を聞き取る力と内容を理解する力があるが、音読はまず音声を聞き取る力を高め、それが内容理解を促進すること、音声を聞き取る能力は一度定着すると長期にわたって温存されると感じる可能性があることが学生の記述回答からわかった。
19 音読を活発にするさまざまな工夫	単著	2004年3月15日	『新英語教育』第422号三友社(17～19頁)	音読指導の効果を高めるためのいくつかの視点(ゴールや目標を明確にする、成果を映像や音声として残す、聞き手を設定する等)を提起した。音読の速度を徐々に上げ、シャドーイングや表現活動につなげる指導過程、内容理解や解釈につながる朗読までのプロセスを紹介した。音読活動の最終ゴールとして実践している「なりきりシャドーイング」(シャドーイングに取り組むシーンを録音することでCNNのニュースキャスターになったように見せかける活動)について紹介した。
20 高校生の高等教育機関進学に関する意識調査	単著	2005年12月26日	『サービス経営学部研究紀要』第7号西武文理大学 (43～73頁)	関東地方の高校3年生約500名を対象に実施したアンケート調査のまとめ。高校生が、高等教育のどのような点に関心を持っているかを分析した。高校3年生が高等教育機関を選ぶにあたり、もっとも重視するのは教育内容であり、次いで教員・施設の順であった。
21 子ども・青年との関わり合いの知恵を求めて	単著	2006年6月15日	『新英語教育』第444号三友社(7～9頁)。	小中学校で進む学級崩壊。その原因の1つとして見過ごされてきたものの中に、子どもの発達障がいが存在する可能性を指摘した。モンスターペアレントの存在が問題視されているが、この背景には保護者の育った時代や環境が関係していることも考慮する必要があると提起した。保護者自身が高度経済成長の時代に育っていることから、自分の親や家族との関わりが希薄であることにも配慮し、親との関係修復の糸口を探ることも考えるべきであるとした。学級崩壊を修復するためには、学校関係者だけでなく専門家も含めた学校内での研修や実践構築を進める必要性を強調した。
22 音読ソフトを利用した音読評価のスコア化:習熟度との関係および繰り返し音読におけるスコア変化の検証	共著	2007年3月1日	『関東甲信越英語教育学会紀要 KATE Bulletin』第21号(37～47頁)(査読付論文)	学習者の語学レベルは、その音読を聞けばおおよそ検討がつくと言われる。しかし、音読評価の方法としては、学習者の音読を録音し、教師が聞いて点数をつけるなど、主観的で手間がかかる。そこで、CALL教室に音読能力測定ソフトを導入し、音読評価を瞬時にを行い、そのスコアがどの程度学習者の習熟度を反映しているかを分析した。習熟度と音読能力のスコアには、比較的高い相関が確認され、音読スコアはある程度学習者の習熟度を推測する目安であることを示した。さらに、音読は繰り返すことにより効果が上がるといわれるが、実際に音読能力測定ソフトのスコアが、練習により上がるのかを検証した。算出されたスコアの平均値を分散分析(反復測定)により検定した結果、大学生の場合およそ25回までの繰り返し読みにより、スコアが有意に上がり続けることが検証できた。本人担当部分:データ収集と分析、考察部分。共著者:阿久津仁史、飯野厚、鈴木政浩。
23 生徒のところに染みる、英語の歌の選び方	単著	2007年3月15日	『新英語教育』第452号(7～9頁)	授業における洋楽の位置づけや教材として取り上げる意義について概観した。これまでの実践事例を概括し、選曲や年間計画においては、文法・文型事項との連動はもとより、生徒・学生の心情を推し量り、時期に応じた曲の配置をすることで、より英語学習に対する意欲が高まることを提案した。
24 高等教育における英語授業の研究—授業実践事例の分析と考察	単著	2007年3月31日	『2006年度研究年報(Annual Report No.3)』大学英語教育学会(JACET)関東支部 (46～50頁)	『高等教育における英語授業の研究—授業実践事例を中心に』全体の構成や出版の意義等を、書籍編集事務局長、大学英語教育学会(JACET)授業学研究委員会関東支部委員長の立場でまとめた。書籍に掲載された授業実践事例には著者自身がキーワードを記載していたため、このキーワードを抽出・分類した。大学における授業実践事例の分類までのプロセスを紹介し、書籍発行の意義を説明した。

25 ダイアログに映画は最適 (人物になりきって)	単著	2007年10月1日	『英語教育』Vol.56 No.9大修館書店(18～19頁)	これまで取り組んできたモノログを中心とした音読練習をさらに発展させ、ダイアログに取り組む映画を教材とした英語授業事例を紹介した。ここでは映画『ロボッツ』を取り上げた。映画の視聴中に経過時間を表示させ、学生は印象に残った場面とその経過時間をメモする。視聴後メモを回収し集計した結果、自活を目指す子どもを励ます父母とのやりとりの場面が多いことがわかった。授業ではその部分を取り上げペア・ワークによる音読練習を進め、最終的には学生が父親の役を演じることで、一種のロールプレイングの効果があり、親の気持ちを推し量る学生の感想を引き出すことができたことを報告した。
26 ソフトウェアを活用した音読スコアの推移分析—音読練習20回は妥当か?—An analysis of computer software measurement and its gains of repeated reading performance. - The efficacy of twenty times of repeated reading aloud	共著	2009年10月1日	『Language Education & Technology』46. 外国語教育メディア学会(61～78頁)(査読付論文)	経験的な知見では、既習の教材は最低20回音読すべきであると言われる。本研究はこうした経験的な知見を大学生と中学生のデータをもとに検証した。海外では繰り返し音読の効果を認める実証的研究は多い。ただし、単調な繰り返し読みは学習者の飽きを生じさせる。そこで本研究では、音読の評価を自動的に行うコンピュータソフトをCALL教室に導入し、そのスコアを元に繰り返し読みの効果を検証した。5回の音読練習の後1回測定をする処遇を5回繰り返し、スコアの推移を分散分析(反復測定)により分析したところ、中学生には測定ごとに有意な差は認められなかったが、大学生のデータでは1回目と3回目の測定、1回目と5回目の測定に有意な差が認められ、5回目の計測で最もスコアが高くなった。本研究の結果からは、学齢が上がった段階(大学生)の繰り返し読みについて20回は十分取組可能であること、学齢が低い段階(中学生)では、繰り返し読みについて特別な指導上の配慮が必要であると考察した。本人担当分:データ収集、分析および執筆全般を担当。鈴木政浩・阿久津仁史・飯野厚。
27 音読の評価をどうするか	単著	2009年10月1日	『英語教育』Vol. 58 No.9大修館書店(33～35頁)	音読を聞けば学習者の熟達度がわかるという経験的な知見に対して、reading fluencyの研究にもとづき、音読の評価方法を具体的に展開した。ストレス・ポーズ・イントネーション個々の評価方法や注意点を、それに合った指導方法やプリントの作成方法とともに紹介した。さらに、多忙な教育現場において、手間のかかる音読評価の省力化について、いくつかの方法を提案し、パソコンソフトによる音読能力評価の可能性についても言及した。
28 The Effects of Repeated Reading on Listening Comprehension of University Students. To Acquire Decoding Skills through Computer Assisted Language Learning.	共著	2009年11月25日	『紀要』第16号国際教育研究所(49～60頁)	基礎的な英単語を音読することが困難な大学生に対して、audio assisted instructionが有効であることに着目した研究。基礎的な英文を使い、音声聞きながら音読する活動を長期間続けることにより、熟達度に有意な伸びが観測された。データをさらに分析することにより、半期の授業で熟達度における上位群と下位群の間に有意な差がなくなり、対象クラス全体で、リーディングおよびリスニング能力の向上がみられた。研究はCALL教室および学内に設置した個人サーバから配信する学習支援システムを活用。研究後のアンケート調査では、授業外の自主的な学習を学生が進めていることがわかった。本人担当分:データ収集と分析および執筆全般鈴木政浩・阿久津仁史。
29 コンピュータソフトの音読評価 その妥当性と評価特性の検証—アメリカ人評価者の評価との関係—The Validity and the Features of Computer Software Measurement: the Relationship Between the Score of Computer Software and American Informants	共著	2010年5月1日	『Language Education & Technology』47. 外国語教育メディア学会(37～50頁)(査読付論文)	コンピュータソフトウェアによる学習者の音読音声評価を試みる研究はこれまでに見られたが、ソフトウェアの評価に関する妥当性を検証した研究は少ない。そこで、本論文では、日本大学生の音読音声アメリカ人評価者が評価した得点とソフトウェアの算出するスコアとの相関係数を算出し、ソフトウェアの評価の妥当性を検証した。その結果比較的高い正の相関が確認でき、ソフトウェアのスコアについて妥当性を検証した。ここで得たデータを、構造方程式モデリングにより再度分析した結果、音読速度とポーズ・ストレス能力に対する評価が学習者の到達度(筆記テスト・リスニングテストの得点)に影響を与える可能性を示唆した。しかし、ソフトウェアのスコアと到達度の間には、直接の因果関係を見出すことはできなかった。本人担当部分:データ収集と分析および執筆全般を担当鈴木政浩・阿久津仁史

30 「外国語(英語)」の特性と青少年の実状からみた人間的アプローチの必然性	単著	2011年2月25日	『紀要』第17号 国際教育研究所(40～60頁)	日本における英語基礎学力回復のために、Moskowitz(1978)の提唱する人間的アプローチが大きな役割を果たすことを主張した。論文の構成は次の通り。(1) 人間的アプローチの授業例と特徴をまとめる(2) 学習指導要領の記述から外国語教育の4つの領域(人格形成・言語習得・異文化理解・コミュニケーション)を設定し、領域間の相互関係を分析後、外国語教育の持つ特性と人間的アプローチの関係を考察する(3) 学力低下問題の経緯と自尊感情を重視する学力論の経過をまとめ、自尊感情が基礎学力形成の土台になることを主張した。さらに教室内コミュニケーションは言語習得を目的としたものだけでなく、授業者・学習者、学習者相互のコミュニケーションに加えて、学習者自身が自分を見つめ直す内省的コミュニケーションにも着目すべきであると提起した。特にHumanistic Approachにはこれらすべての要素が含まれており、授業に取り入れる価値は高いと結論づけた。
31 大学における「楽しい」授業の創り方	単著	2011年3月15日	『新英語教育』No.501(10～12頁)	英語授業の楽しさを8つの領域(居場所のある楽しさ、わかる楽しさ、できる楽しさ、知りたいと思う楽しさ、成長する楽しさ、参加・表現できる楽しさ、変化に富む楽しさ、成績と関係ない楽しさ)に整理し、授業の中でどの楽しさを配置するかを考えながら授業案を作成することを提起した。本稿で取り上げたのは、大学における洋画のワンシーンをアフレコの活動で教材化する授業である。1コマの授業の展開の中に、どの領域の楽しさを配置したかを紹介し、学生の授業に対する感想から、授業者が意図した楽しさを学習者が体験できたかどうかを検証する手順について整理した。
32 「英語授業学」研究の課題－英語「授業研究」と比較して－	単著	2011年3月20日	『言語教育研究』創刊号 桜美林大学(55～65頁)(査読付論文)	英語授業学研究の課題を、戦後日本で盛んであった授業研究の歴史から論じた。授業研究は、個別の授業を分析し、どのような点がすぐれていたかを論じることに特徴がある。しかし、すぐれた授業とはどのようなものを体系的にまとめておらず、研究の蓄積を個別の授業内部に留めてしまうという問題点があることを指摘した。ここから、すぐれた授業の要因を整理することが授業学研究の役割であると論じ、英語という教科の性質から、授業者・学習者・教材の結びつきからすぐれた授業を構築すべきことを主張した。
33 英語授業における「楽しさ」の要因に関する研究 A Study on Factors of Enjoyment of Learning English in Classroom.	単著	2012年3月1日	『関東甲信越英語教育学会紀要(KATE Bulletin)』第26号(1～14頁)(査読付論文)	英語授業における楽しさ(「楽しさ」)に関しては、授業者の視点からいくつかの研究がある。これらの研究は「楽しさ」の一部だけを取り上げるか、学習者の感想の中から得られた「楽しさ」の記述にとどまることが多い。そこで、授業者の考える「楽しさ」の種類をまとめ、これを元に中学生・高校生・大学生を対象に質問紙調査を行った。因子分析の結果、学習者が考える楽しさの要因には5つあることがわかった。また、中高大のデータ間で有意な違いは確認できず、中高大の学齢を問わず「楽しさ」の要因は5つあることがわかった(参加表現する楽しさ、言語文化的知識理解の楽しさ、教科書外のことを学ぶ楽しさ、できるようになる楽しさ、多様な学びの楽しさ)。因子分析の際、天井効果が認められたため除外された質問項目があった。「安心して参加できる楽しさ」「よくわかる楽しさ」と「英語を使いこなす楽しさ」であった。前2者は「楽しさ」の5要因を支える土台であり、後者は楽しさの5要因を経験した後に求められる楽しさであると考え、英語授業における楽しさの構造基礎的な英単語を音読することが困難な大学生に対して、audio assisted instructionが有効であることに着目した研究。基礎的な英文を使い、音声を聞きながら音読する活動を長期間続けることにより、熟達度に有意な伸びが観測された。データをさらに分析することにより、半期の授業で熟達度における上位群と下位群の間に有意な差が観測できなくなり、対象クラス全体で、リーディングおよびリスニング能力の向上がみられた。研究はCALL教室および校内に設置した個人サーバから配信する学習支援システムを活用。事後のアンケート調査では、授業外の自主的な学習を学生が進めていることがわかった。音声面の指導が授業外の自主的な学習を促進し、到達度を高めることに寄与すると結論づけた。
34 大学における音読指導がリスニング能力に与える影響－コンピュータ・ネットワークを利用したdecoding skillsの育成－ The Effects of Repeated Reading on Listening Comprehension of University Students: to Acquire Decoding Skills through Computer Assisted Language Learning.	単著	2011年7月31日	『サービス経営学部紀要』第18号 西武文理大学(37-47頁)	楽しさの構造を元に、小中高大4つの授業実践を分析した。いずれの実践にも共通しているのは、「安心して参加できる楽しさ」を重視することで学習者の学習意欲を引き出していることであった。4つの実践は、「楽しさ」の構造の土台には「安心して参加できる楽しさ」があると見解と共通していることがわかった。本論では学力形成と「楽しさ」の関係についても言及した。楽しい英語授業が増えたが、学力は低下したと言う主張に対して、活動そのものが楽しいだけでは学力形成に結びつかず、「考え」「表現」「わかってもらえる」という一連の過程を通じて得る結果としての「楽しさ」が、学力形成につながることを示唆した。
35 生徒学生からみた楽しい英語授業の要因	単著	2012年4月15日	『新英語教育』第514号 三友社出版(7～9頁)	楽しさの構造を元に、小中高大4つの授業実践を分析した。いずれの実践にも共通しているのは、「安心して参加できる楽しさ」を重視することで学習者の学習意欲を引き出していることであった。4つの実践は、「楽しさ」の構造の土台には「安心して参加できる楽しさ」があると見解と共通していることがわかった。本論では学力形成と「楽しさ」の関係についても言及した。楽しい英語授業が増えたが、学力は低下したと言う主張に対して、活動そのものが楽しいだけでは学力形成に結びつかず、「考え」「表現」「わかってもらえる」という一連の過程を通じて得る結果としての「楽しさ」が、学力形成につながることを示唆した。



36 語認識精度と熟達度の関係ー単語リストを使った英検合格予測の試みー	単著	2012年7月31日	『サービス経営学部紀要』第20号 西武文理大学(23～35頁)	リストに示された単語の発音がどの程度わかるかで、英検の級別合格予測が可能かどうかを検証した。対象は大学1年生であった。英検長文問題に使用されている単語を無作為に抽出し、3級・準2級・2級の単語リストをそれぞれ複数用意した。これらのリストに示された単語の中で発音のわからない単語の個数と意味のわからない単語の個数を記録した。各級ともに複数のリストを用意し、どのリストを使っても結果に有意な差がないことを確認した。意味のわからない単語は、発音のわからない単語のおよそ1.8倍であった(重回帰分析)。この結果と英検の模擬試験のスコアを比較したところ、リストに示された発音のわからない単語の個数がおよそ3%以下の対象者は合格圏内であることがわかった。同様の調査を複数回実施したが、結果が同じであったことから、単語の発音がどの程度わかるかで英検の合格予測がある程度可能になると結論づけた。
37 学齢が望ましい英語授業の要因、授業の楽しさと勉強の好き嫌いの関係におよぼす影響	単著	2012年12月26日	『サービス経営学部紀要』第21号 西武文理大学(23～35頁)	中高大学生を対象とした質問紙調査により、望ましい英語授業と授業の楽しさ・勉強の好き嫌いの関係を学齢別に分析した(共分散構造分析・等値制約および分散分析)。全体の傾向は次の3点であった。(1)英語の授業が楽しいと感じるほど英語の勉強が好きだと感じている(2)望ましい英語授業に関する2つの要因(授業内指向要因・授業外指向要因)の中には、授業の楽しさに直接影響を与える項目と間接的に影響を与える項目があった(3)授業内指向要因の評価が高く、日本人学習者の内向き志向を反映している。学齢別比較の結果は次の2点であった。(1)望ましい英語授業に対する評価は高校が最も低い(2)学齢が低いほど授業内指向要因が楽しさに影響を与え、学齢が上がると授業外指向要因が楽しさに影響を与える。授業づくりに際しては、学齢に応じて望ましい英語授業の観点を変えることが必要であった。
38 望ましい英語授業の要因	単著	2013年3月20日	『言語教育研究』第3号 桜美林大学(85～95頁) 査読付論文	中高大学生を対象とした質問紙調査の結果から、望ましい英語授業の要因を抽出した。文献や論文の中から授業者の考える望ましい英語授業に関するキーワードを抽出した。次に中高大学生を対象とした記述式アンケートから学習者の考える望ましい英語授業に関するキーワードをそれぞれ抽出した。これらを統合・分類し質問紙を作成した。因子分析の結果、学習者の考える望ましい英語授業には3つの要因があることがわかった。(1)授業者の学習者に対する寛容さや教科の専門性、授業の見通し、自立支援を含む質問項目からなる要因(授業内指向要因)(2)学習者同士の良好な人間関係、異文化間コミュニケーション、教材選択、授業者の学術的専門性からなる項目(授業外指向要因)(3)授業規律や多様な学び、コミュニケーション活動に関する質問項目からなる要因(授業成立要因)であった。望ましい英語授業の要因から2つの要因(授業内指向要因・授業外指向要因)と英語授業に対する楽しさの要因の関係を分析した(中高大学生を対象とした質問紙調査のデータを使用)。授業内指向要因よりも授業外指向要因の方が楽しさの印象との関係が強かった。授業外指向要因に含まれる項目は、学習者同士の関係や教室の外を志向しているため、学習者には難易度が高いという印象を与えている可能性があると考えた。そのため楽しさを重視することで授業外指向要因に対する抵抗感を下げる必要があることを主張した。鈴木政浩・三沢渉
38 望ましい英語授業の要因と楽しさの関係	共著	2013年3月1日	『関東甲信越英語教育学会誌 (KATE Journal)』第27号(43～55頁) 査読付論文	望ましい英語授業の2要因(授業内指向要因・授業外指向要因)と英語授業における楽しさの要因との関係を分析した(共分散構造分析)。授業内指向要因よりも授業外指向要因の方が楽しさの印象との関係が強いことから、移行に際しては楽しさの印象が橋渡しをするという仮説を設定した。中高大学生を対象とした質問紙調査のデータからは次の2点がわかった。(1)授業内指向要因は授業内指向要因に強い影響を与える。つまり、前者は後者に移行するものであると学習者はとらえている可能性がある(2)授業内指向要因が授業外指向要因に与える影響とは異なり、楽しさの要因は授業外指向要因に影響をあまり与えていなかった。これは、現在行われている英語授業における楽しさは、授業外指向型の授業へとつながっておらず、これが英語運用能力向上を妨げる一因になっている可能性を指摘した。
40 望ましい英語授業の2要因の関係ー楽しさの影響をふまえた分析ー	単著	2013年3月20日	『言語文化教育研究』第3号 東京言語文化教育研究会(109～120頁)	望ましい英語授業の2要因(授業内指向要因・授業外指向要因)と英語授業における楽しさの要因との関係を分析した(共分散構造分析)。授業内指向要因よりも授業外指向要因の方が楽しさの印象との関係が強いことから、移行に際しては楽しさの印象が橋渡しをするという仮説を設定した。中高大学生を対象とした質問紙調査のデータからは次の2点がわかった。(1)授業内指向要因は授業内指向要因に強い影響を与える。つまり、前者は後者に移行するものであると学習者はとらえている可能性がある(2)授業内指向要因が授業外指向要因に与える影響とは異なり、楽しさの要因は授業外指向要因に影響をあまり与えていなかった。これは、現在行われている英語授業における楽しさは、授業外指向型の授業へとつながっておらず、これが英語運用能力向上を妨げる一因になっている可能性を指摘した。

41 英語リメディアル教育:私はこう考える(学習意欲、楽しさの要因、足場作り、そして学力向上)	共著	2013年3月31日	日本リメディアル教育学会誌第8巻第1号(181~187頁)査読付論文	日本リメディアル教育学会創立10周年を前に、日本におけるリメディアル教育の在り方についてその後の可能性を論じた。学生を英語学習に取り組ませるにはよく言われる学習動機の形成が重要である。動機づけにはさまざまな要素があると言われるが、リメディアル教育の分野に関して言えば、楽しさと足場作りである。楽しさの中で特に重視すべきなのは、参加表現する楽しさである。しかしその中身は、ペアワークやグループワークに限定されるものではなく、1人1人がじっくり考え、考えた結果を共有し合う楽しさである。また、楽しさを学力形成につなげるためには、小さなステップを積み重ねることが学習動機の継続に必要であるとした。本人担当部分:楽しさの要因に関する問題提起牧野眞貴、石井研司、鈴木政浩、平野順也
42 発達障がいと向き合う英語の授業 大学英語授業での対応	単著	2013年6月15日	『新英語教育』7月号 No.527(16~17頁)	これまで担当した授業の中で、発達障がいを持つと思われる学生の事例と、こうした学生に対する対応をまとめた。発達障がいを持つ学生に対しては、(1)音声よりも視覚に訴える指導が有効である(2)優先順位をつけることが苦手なため、1指示1行動を徹底する(3)発達障がいをも本人も周囲も認識していないことから、差別的な待遇を受けた経験が多い。対人関係に恐怖感を覚える場合があるので個別の課題を用意する、などの配慮が必要である。また、近年HSP(Highly Sensitive Person)など傷つきやすい性格が存在することがわかってきたことなど、生徒学生把握にはできるだけ幅広い知見を授業者が持つ必要があるとまとめた。
43 望ましい英語授業と楽しさの要因の関係ー英語授業学研究的視点からー	単著	2014年3月31日	『中部英語教育学会紀要』第43号(139~144頁)査読付論文	生徒学生が考える望ましい英語授業に2つの要因を想定した(授業者主導型授業と、学習者主導型授業)。この2つの要因と楽しさの要因との関係を分析した。授業者主導型授業は学習者主導型授業に移行すると学習者は考えているが、その際楽しさの要因がどのような役割を果たしているのかを共分散構造分析を用いて分析した。分析の結果次の2点を仮説として提起した。(1)楽しさの要因の中で「参加表現の楽しさ」がもっとも安定した要因である可能性がある(2)授業者主導の授業は参加表現の楽しさを重視した授業に移行しやすいが、その先の学習者主導の授業につながりにくい可能性がある。結論として、楽しい授業は重要であるが、学習者が自律した授業づくりへと発展させる視点を授業者は持つ必要があることを提案した。
44 英語授業における楽しさの役割再考 生徒学生の望む授業と楽しさの関係 Relationship Between Factors of Preferable Teaching Practice and Enjoyment of Learning English in Classroom	単著	2014年2月15日	『新英語教育』No. 536(7~9ページ)	質問紙調査をもとに、生徒学生が望む英語の授業と楽しさとの関係をまとめた。生徒学生が望む授業には、授業者が主体となって進む授業と、生徒学生が主体となって進む授業の2つの枠組がある。楽しさを中心とした授業は、授業者主体の授業が生徒学生主体の授業に移行する際の橋渡しをしている。しかし、生徒学生の感覚では、楽しい授業は楽しさでとどまっておらず、生徒学生中心の授業にはつながっていない。現在行われている楽しい授業には限界があり、生徒学生主体の授業に移行するように進める必要があると主張した。
45 チャンク単位の一斉音読訓練が黙読速度と読解スコアに与える影響	共著	2014年11月1日	『Language Education & Technology』第51号(243~266頁)	チャンク提示によるリーディング練習がリーディングにおける理解度と理解速度にどのような影響を与えるかを検証した研究。チャンク提示一斉音読練習群とチャンク提示黙読練習群の比較、チャンク提示音読練習の成果を学習者の到達度と比較した。前者の比較により、チャンク提示の音読練習は読解効率向上に寄与し、後者の比較ではチャンク提示の音読練習は読解速度に寄与する可能性を示唆した。山口高嶺・神田明延・湯舟英一・田淵龍二・池山和子・鈴木政浩
46 音声指導を重視した授業実践事例(リメディアル教育における高大接続に関わって)	共著	2016年3月31日	『リメディアル教育研究』第11巻第1号(23~29ページ)査読付論文	高大接続とえばかつては高校の授業実践を引き継ぎ、その内容を大学での授業に活かすとらえていたと思われる。近年大学の授業実践研究も活発になり、大学でこそできる英語授業実践を高校にフィードバックする時期にきた。英語基礎学力の定着と学習意欲向上のために、音声・音読指導は欠かせない。こうした前提に立ち、インタラクティブな音読練習、音読を活かしたレシテーション、ジャズチャンツを使った音読指導等の授業実践とその効果をまとめた。本人担当部分:冒頭の問題提起およびまとめ。鈴木政浩、居村俊子、川井一枝、小山政史、原口友子
47 健康福祉マネジメント学科卒業生のキャリア形成に関する調査ー量的分析ー	単著	2017年12月20日	『西武文理大学サービス経営学部研究紀要』第31号(33~49ページ)	健康福祉学科卒業生213名を対象とした質問紙調査の量的分析。在学中の学びと卒業後の勤務や転職意識に関して分析を行った。その結果、次のようなことがわかった。(1)仕事に対するインセンティブ感覚が高い卒業生は仕事内容に満足する傾向があり、その結果転職の意欲が高くない。(2)逆にインセンティブ感覚が低い卒業生は仕事内容以外のところで満足を感じている反面、転職の意欲が高いことがわかった。

48 自己像形成意識と英語学習動機づけ要因の関係—英語授業学研究の視点から—	共著	2018年1月31日	中部英語教育学会『紀要』47(73~78ページ) 査読付論文	英語学習における動機づけには、当該言語を使用するコミュニティーに所属したいと考える統一的動機づけがある。これをさらに発展させ、理想第2言語自己像(当該言語を使用する自分の姿を思い浮かべること)により生ずる学習意欲を動機づけ要因に含める研究がある。本論文は全国の大学生1163名を対象にした質問紙調査のデータを確率的因子分析により分析した。その結果から、実用的な英語学習を通じた自己像形成を促進することが求められるが、第2言語習得環境とは別の形で進める必要があることを指摘した。理想第2言語自己像形成の準備段階として、理想外国語自己像を想定し、日本の学習環境に合わせた自己像形成とそのための授業づくりの枠組と発展段階(わかる自分→できる自分→英語を使う自分)について提案した。鈴木政造, 阿部牧子, 松本由美
49 英語学習動機づけ要因における自己像形成の位置づけ関係	共著	2018年3月25日	国際教育研究所『紀要』24号(1~15ページ)	英語学習の動機づけの要因として、英語を使う自分の姿を想像するなど、理想第2言語自己像の形成を認める研究がある。本論文はこうした理論的背景にもとづき、日本人学習者の自己像形成と授業や学習内容とどのような関係にあるかを質問紙調査で得たデータをもとに分析した。対象者は全国の大学生1163名であった。探索的因子分析の結果、対象者の自己像形成と授業との間には何らかの関係がある可能性があること、しかし実用的な英語学習と自己像形成との間に直接の関係は認められない可能性があることがわかった。実用的な英語学習を授業で取り入れながら自己像形成を促進する授業づくりの重要性について指摘した。鈴木政造, 阿部牧子, 望月好恵
50 学習方略を配置したシラバスを使った授業実践例—英語授業学研究の視点から—	単著	2019年3月31日	『外国語教育メディア学会(LET)関東支部研究紀要』(103~114ページ)	望ましい授業の要因に、「見通しを示す授業」と「自律支援を促す授業」がある。この2つの要因を統合し、シラバスに学習方略を配置し、簡易ポートフォリオとして提示する授業実践の展開例と、その効果について分析した。事後調査では、当初学習方略の意義について評価が低い群の学生が、課題を達成したことで事後評価を高めたことがわかった。学習方略は提示するのみならず、課題の達成を通じてこそ、自律支援に役立つことを提案した。
51 英語授業におけるコミュニケーション	単著	2018年9月15日	『新英語教育』第590巻(8~9ページ)	英語授業におけるコミュニケーションを5つの視点から分類した(4技能、授業成立と学力向上、発問、内省、人間形成)。この5つの視点から、本特集に掲載された小・中・高・大の授業実践についてコミュニケーションの視点からコメントを加えた。
52 借用語を通じた基礎語彙の定着向上を目的とした包括的借用語リストの妥当性検証	共著	2020年1月31日	『中部地区英語教育学会紀要』49, 119-124.	借用語の指導効果については賛否が分かれる。本論文では借用語の効果を認める立場から、独自のリストを作成した。このリストを先行研究で提示されているリストと比較し、妥当性を検証した。その結果、独自リストの総語数は2,863語を抽出した。先行研究との重なり語の割合は71.52%となり、おおむねリストの妥当性を検証した。南部匡彦・鈴木政造
「学会発表」 1 英字新聞、英文雑誌の教材化の試み・中学校での実践から  2 英字新聞および英文雑誌の教材化の試み	共同  共同	1993年7月10日  1993年7月31日	時事英語学会第22回中部支部研究例会  大学英語教育学会第32回大会	国際化・情報化時代には身のまわりにあるメディアから、情報を収集し整理する能力が要求される。英字新聞や英文雑誌には実際の社会に起こっている話題がふんだんに盛り込まれており、中学生高校生にもアクセス可能な状態となっている。逐語理解をベースにしたリーディング指導の観点を直し、学習者がすでに理解した語彙をもとに英文テキスト全体の内容を教師の発問をもとに推測させる指導手順について具体的に報告した。本人担当部分: 英字新聞・英文雑誌を教材化する際の指導過程と手順に関する考察と実践報告。共同発表者: 鈴木政造, 浅川和也  自分の知っている範囲の単語を抽出することにより概要を把握させようとした授業実践報告。中学2年生を対象に英字新聞を教材化した。授業者がゆっくりと英文を読み上げてあげる間、生徒は音声から意味のわかる語句、数字等に線を引く。その後、辞書を使わず短時間で教師の用意した設問に答えるという形式を取った。設問は生徒の知っている単語から容易に解答を導き出せる。この授業により生徒の学習負担は軽減し、読んだ内容についてその要点や概要をつかむ学習方略を促進することにつながった。本人担当部分: 英字新聞等を教材化する手法と実践報告および理論的考察 共同発表者: 鈴木政造, 浅川和也

3 英語教育における国際理解教育の事例 II—メッセージのある英語の歌を使って	共同	1997年9月5日	大学英語教育学会第36回大会	国際理解教育(Global Education)にはさまざまなアプローチがあるが、その中でも学習者に受け入れられやすいのは、英語の歌やビデオクリップ、映画などを使った手法である。こうした教材は学習者の学習動機を高める。また、メッセージ性の強い歌詞は、自己の内面を認識させる教材にもなりうるという視点から洋楽を教材とした中学校での授業実践を紹介した。本人担当部分: John Lennonの歌を取り上げ、彼の人生がどのように歌詞に反映しているのかを読み取り、自分と家族の関係を考えさせた。共同発表者: 浅川和也、鈴木政造、菊池恵子、大橋真紀子、清水順
4 グローバルな視点で発信する映画を使った授業—オーラル・コミュニケーションからライティングへ	単独	1999年3月13日	映画英語教育学会 第5回大会	Global issuesに関連した教材は増えた一方、Global Educationの実践家からは「よい教材でも生徒・学生が食いついてこないため、授業が上滑りになりがちだ」との指摘も聞く。本報告は明確なメッセージを持つ映画がすぐれた外国語教育の教材になることに着目し、教師の発問によるグループ・ディスカッションがライティングの活動を活発にする授業のプロセスを紹介した。学習者は自分の感じたことを英語で表現し、仲間と価値観を交流する人間的コミュニケーションの大切さや、環境・人権・平和などグローバルな題材を通して、世界や社会に目を向けながら外国語を使うことの重要性に気づくことがわかった。近年音読指導は効果的な英語学習の方法であると認められつつあるが、どのようなプロセスで指導を進めればよいかはまだ明確に示されていない。そこで半年の授業実践を元に、3段階のプロセスを提起。どの程度音読に取り組みばどの程度の力が付くのかをデータと学習者のコメントを元に分析した。さらに音読に役立つ教材や評価の視点を含め、今後の音読指導に関しての方向性を示唆する観点を提案した。
5 音読指導のプロセス	単独	2001年6月9日	ELEC 同友会 音読研究部会	映画を通して多文化を学ぶことをテーマにゼミの学習成果を報告集という形でまとめ上げた。その経過をゼミに所属する学生とともに報告をした。映画「バッチ・アダムス」を視聴後グループに分かれ、グループごとの課題を決めさせた。調べ学習を通してレポートを作成し、冊子にまとめるまでを説明した。学生の選んだテーマは、映画のセリフの書き取りと日本語訳の作成、死を間近に控えた子どもたちの願いをかなえるMake a Wish Foundation Japanでの聞き取り調査、アメリカの医療制度、マザー・テレサとバッチ・アダムスの接点等であった。共同発表者: 鈴木政造、相原恵理子、石井妙子、佐々木久美子、新谷正樹、田中尚也、水嶋さおり、篠原裕和、杉浦政人、青木彩子、金敬姫、川邊隼人、斎藤明彦
6 教室を飛び出す映画の活用法—インターネットでの情報収集から本づくりへ	共同	2002年4月27日	映画英語教育学会 第8回大会	中高生と、その生徒学生の授業を担当する英語授業者を対象とし、英語音読に関する質問紙調査を実施した。授業者の音読に対する意識と生徒の意識の共通点やずれを探索的に分析した。授業者・生徒学生ともに音読がリーディングやスピーキングに役立つとする点で差はなかった。しかし、音読の個別指導の実施状況については、授業者は比較的多く取り入れていると考えているのに対し、学習者はあまり個別指導を受けていないという意識の差がみられた。音読は学習意欲を高めると意識は学習者よりも授業者の方が強く、ここにも認識の違いが見られた。また、音読に対しては授業者>中学生>高校生の順で肯定的な見方をしていること、音読の有効性については、授業者・学習者ともに男女間で違いがある項目が多いことがわかった。共同発表者: 飯野厚、鈴木政造、間中和歌江、清水由紀子
7 外国語学習環境における音読再考	共同	2002年9月29日	大学英語教育学会第41回大会	音読活動を活発にする教材づくりと指導手順について報告した。洋楽・洋画には、音読の活動を活発にし、習熟度を高める教材となるものがある。その具体的な例をあげつつ、授業でどのように活用したかを報告した。
8 洋楽と洋画を利用した音読指導の実践事例について	単独	2002年12月25日	新英語教育研究会 埼玉支部 例会	DVDの音声・映像をコンピューターに取り込み編集・加工する技術的な手順、取り込んだ動画や音声教材を教材化した授業に活用する手順をまとめた。学生が取り組んだ朗読活動の事例を報告した。
9 パソコン・DVDを活用した教材づくりの試み	単独	2003年1月5日	新英語教育研究会 関東ブロック 集会	音読は単調になりがちであるとする知見に対し、どのような活動で取り組みれば活発な活動になるかを実際の授業事例を紹介しながらまとめた。音読に活用する洋楽とその活用法、テキストの扱い方と読速度の調整、洋画の一場面を元にサウンドトラックをBGMにしながらTranscriptを朗読する表現活動などを、学習者の発表を実際に視聴しながら提示した。さらに洋画を活用した朗読指導を行う場合の教材の作り方を、実際に使った教材を紹介しながら紹介した。
10 音読をどうやってますか？これが真の力が付く音読だ！！目からウロコの音読法	単独	2003年3月15日	新英語教育研究会 千葉支部 例会	

11	中学・高校・大学を貫く音読指導(洋画・洋楽を使って)	単独	2003年5月10日	新英語教育研究会神奈川支部	音読指導の現状を、2002年に実施したアンケート調査から分析。教員と学習者の間にある意識のギャップについて考察を加えた。さらに単純かつ単調な活動と思われる音読を、どのような活動で取り組めば活発な活動になるかを実際の授業事例を紹介しながらまとめた。音読に活用する洋楽とその活用法、テキストの扱い方と読速度の調整、洋画の一場面を元にサウンドトラックをBGMにしながらTranscriptを朗読する表現活動などを、学習者の発表を実際に視聴しながら提示した。
12	音読指導	単独	2003年11月8日	山梨県高等学校教育会・教育研究集会	音読の活動を取り組めば活発な活動になるかを実際の授業事例を紹介しながらまとめた。音読に活用する洋楽とその活用法、テキストの扱い方と読速度の調整、洋画の一場面を元にサウンドトラックをBGMにしながらTranscriptを朗読する表現活動などを、学習者の発表収録したビデオを視聴しながら紹介した。
13	映画で社会的問題にせまる	単独	2004年10月2日	アジア・ユース・ピースセミナーポスト企画主催ピース・セミナー	アメリカ映画『パッチ・アダムス』(Patch Adams)では、冒頭シーンでロビン・ウィリアムズ演じる医師が病院へ向かうバスの中で人生を家路にたとえる独白が美しい音楽をバックに流れる。映画の音声を消してBGMをバックに自分がその役になりきって感情を込めて朗読してみる授業の流れをまとめた。さらに教材選択の視点やパソコンやDVDを使った教材づくりのノウハウを紹介した。
14	博士論文から楽しくできる単語ゲームまで	共同	2004年11月20日	ELEC 同友会 英語教育学会 第10回記念研究大会	語彙指導と音読指導は外国語習得では重要な領域であるが、ともに学習者まかせにされることが多い。本発表は、語彙学習について生徒対象の質問紙調査を関東近県の5つの高校で実施し、その分析と考察をまとめた。ここでは学習者の語彙学習の方略はきわめて貧弱で狭く、また授業中にも特別な指導を受けていないことがわかった。しかし洋画や洋楽を通じて学習した語彙の再認をするという学習者が予想以上に多く、学習方略の指導をすることで付随的学習(incidental learning)が促進される可能性があることを指摘した。また高校ごとの個別の分析から、語彙学習に対する学習者の意識は、学校の状況によりかなりの差があることに言及した。共同発表者:岡田順子、萱野豊、鈴木政造
15	外国語(英語)の音読に関するWarm-up Effect検証ーリスニングに音読が及ぼす影響についての実証的研究	単独	2005年7月17日	外国語教育メディア学会 (LET) 全国研究大会	本発表では、音読が言語の技能を促進するという視座から、リスニング能力の伸びに音読がどのような役割を果たすのかを実証的に考察した。特に音読の活動で即効性の高いWarm-up Effect (Listening Comprehension Testの直前に音読をするとスコアが伸びる現象)について分析した。中学・高校・大学それぞれの授業で同様の実験を行いスコアの伸びを分析した結果、中学校では有意傾向、高校では有意な伸びが確認できた。共同発表者:阿久津仁史、飯野厚、鈴木政造
16	洋画を活用した英米文学への取り組み	単独	2005年10月1日	映画英語教育学会全国大会	文学部英米文学科の学生でも、原典を読み進める面白さを味わう機会は必ずしも多くないのが実情である。卒業まで原典にまったく触れることなく卒業する学生も少なくない。本発表は、2003年4月から2004年1月まで担当したReading1-A、1-B(英米文学)の取り組みについての報告である。英米文学は難しくて読めないと考えた学生と、William Shakespeare's Romeo + Juliet (Leonardo DiCaprio主演)の視聴、ROMEO + JULIET (スクリーンプレイ社)を使ったTranscriptの朗読に取り組んだ。その後インターネットを活用し、洋画化された英米文学を各自選んで視聴。その後、翻訳書と原典を使いながらレポートを作成した。レポート内容は、原典のあらすじ・作者のプロフィール・映画と原典の違いをまとめた上で、自分のお気に入りの名場面を選び翻訳するという内容であった。レポートの執筆から、レポートを報告集として全員に配布するまでを報告した。
17	語彙習得を促進するアクティビティー集	共同	2005年11月12日	ELEC 同友会 英語教育学会 全国大会	語彙習得理論的背景にもとづき、中学・高校の英語授業で活用できるアクティビティー集を紹介。導入・展開・定着など授業の諸側面に合わせた効果的な取り組み方を、実際に授業で実践した後の学習者のフィードバックをふまえて報告した。共同発表者:岡田順子、萱野豊、鈴木政造
18	英語教育における音読指導の効果: 音読能力測定ソフトの活用と実践例	単独	2006年7月22日	外国語教育メディア学会 (LET) 関東支部 音声・映像部会	音読能力測定ソフトウェア(Speak!)を使い、音読指導の指導例と使用した学生の感想をまとめた。Speak!は自分が音読したい英文を自由に貼り付け、それをコンピュータに搭載した音声エンジンが音声化することができる。学習者が音読した音声を録音するとともに、発音の正確さを判定するソフトウェアである。洋楽の歌詞と音声、洋画などの動画を取り込んだ練習風景を紹介し実演した。学生からは、「話す力が付く」「楽しい」「操作がわかりやすい」「評価が妥当である」等の感想が寄せられた。

19	音読能力のスコア化と英語学力との相関に関する研究	共同	2006年8月3日	外国語教育メディア学会(LET)第46回(2006年度)全国大会	音読能力測定ソフトウェア(Speak!)が算出するスコアが、どの程度学習者の習熟度と相関があるかを検証した。Webベースの標準化されたテスト(CASEC)のスコアとSpeak!の算出するスコアには、比較的高い正の相関がみられ、音読能力が学習者の習熟度とある程度反映していることを検証した。共同発表者:阿久津仁史、飯野厚、大澤由加里、鈴木政浩
20	到達目標を明確に示したシャドーイングの指導事例	単独	2006年8月3日	外国語教育メディア学会(LET)第46回(2006年度)全国大会	シャドーイングの効果が近年さまざまな研究で検証されて来たが、学習者には若干難易度が高く、継続するためには個人的な努力が要求される。そこで、ビデオ収録をゴールとして示し、パフォーマンス発表の一環としてシャドーイングを位置づける授業づくりについて報告した。洋画のワンシーンをシャドーイングし、その音声を映画の映像と重ねる朗読シャドーイングや、CNNの音声をシャドーイングしているところをビデオ収録する「なりきりシャドーイング」の手法を、実際の学生のパフォーマンス映像を含めて紹介した。
21	Repeated reading aloudと音読能力の伸びとの相関に関する研究—音読能力のスコア化の可能性を探る	共同	2006年8月21日	関東甲信越英語教育学会第30回研究大会	学習者の英語習熟度を測定するWebベースのテスト(CASEC)と音読能力測定ソフト(Speak!)のスコアの相関を検証した上で、繰り返し読みによる音読能力スコアに有意な伸びがみられるかどうかを検証した。大学生40人のデータから、習熟度と音読能力の間には比較的高い相関が得られるとともに、繰り返し読み練習後5回分の音読能力スコアを分散分析(反復測定)にかけた結果、有意な伸びがみられた。共同発表者:阿久津仁史・飯野厚・鈴木政浩
22	音読能力測定ソフトSpeak!が支える英語学力—基礎的音読から洋画・洋楽を活用したシャドーイングまで	単独	2007年5月26日	外国語教育メディア学会(LET)関西支部2007年度春季研究大会	従来手間のかかることが多かった音読に対する評価評定を、マイクに向かって音読するだけで測定してくれるコンピュータソフトウェアSpeak!を紹介。ソフトウェアの機能、仕様、活用方法の概要を解説。さらに実際にこのソフトウェアを授業で使った学生の様子をビデオで紹介し、使用後の印象についてアンケートの結果をもとに分析。学習に対する動機付けが促進されるなど具体的な成果について報告した。また、ワークショップ形式で参集した他大学の先生方に実際に使っていた、評価方法の指針を提案した。
23	音読20回は妥当か?音読練習ソフトを活用した反復音読中の音読スコアの推移分析	単独	2007年8月8日	外国語教育メディア学会(LET)第47回(2007年度)全国研究大会	音読能力測定ソフト(Speak!)がスコア化した学習者の音読能力について、その評価の信頼性に関する検証が必要と判断。中学生に複数の異なるテキストを読んでもらい、そのスコアを分析した。その結果極めて高い $\alpha$ 係数が得られ、ソフトウェアのスコアは信頼性の点では十分満足のいくものであることがわかった。このスコアが信頼できるものであるという前提に立ち、中学生を対象に収集した繰り返し読みのスコアを分析し、大学生のデータと比較した。大学生に関しては繰り返し読み練習後のスコアの伸びには継続して有意な差がみられた。中学生に関しては大学生と比較して早い時期にスコアの減衰がみられることから、学齢が下がるにしたがい、繰り返し読みで生じる飽きに、早いうちに対処する必要があることを示唆した。共同発表者:阿久津仁史・飯野厚・鈴木政浩
24	英文内容理解に及ぼす音読の影響—リーディングにおけるWarm-up Effectの検証	共同	2007年8月17日	関東甲信越英語教育学会第31回千葉研究大会	リスニングにおけるWarm-up Effect検証に続き、リーディングにおいても同様の効果があるかを検証した。中学校においてリーディングの前に音読に取り組む群と、CDのみ聞く群に分け実験を実施。得点の平均値を分散分析したところ、交互作用はみられなかったものの、主効果に関しては実験群に有意な伸びが見られた。この結果、今回の実験では、リーディングに関し、音読のWarm-up Effectを検証するにはいたらなかった。共同発表者:阿久津仁史・兼子真季・鈴木政浩
25	授業活性化に向けたeラーニングの役割とFD研修の試み:英語基礎学力を高める音読能力ソフトSpeak! 基本的な音読練習から、洋画・CNNを使ったシャドーイングの指導まで	単独	2007年11月10日	アルクネットアカデミーワークショップ(大阪会場)	コンピュータソフトウェアの活用法と使用上の注意等について紹介、その機能について実演した。このソフトウェアを使った授業風景の上映や学生の感想とともに、練習に取り組んだ成果として、学生のシャドーイングを録画した映像を紹介し、使用した効果や成果について報告した。ソフトウェアの使用により、学習者は授業者に依存しない音読活動を進めることができるようになったことを報告した。
26	音読指導の今日的課題:リメディアルからシャドーイングまで	単独	2008年3月13日	東京言語文化研究会(TALCE)定例研究会	学生に対する音読指導を体験するワークショップ。先行研究から音読にまつわる興味深い現象についてクイズ形式で紹介。その後、単語レベル・語句レベル・文レベル・段落レベルの音読のポイントを、参加者に音読活動に取り組んでもらう形で紹介した。基礎的な音読から、海外のニュース番組の音声がつづりに聞こえるまでの指導手順と効果を実際に体験していただいた。

27 音読練習の方法が音読の熟達度に及ぼす影響	共同	2008年8月9日	第34回全国英語教育学会東京研究大会	大学生が初見のテキストを音読する音声を録音後、同一対象者に対し3つの音読処遇を実施した。練習後テキストを音読する音声を録音した。処遇は、教師の指導(教師指導)・コンピュータソフトウェアによる独習(PC)・自力での音読(自力)の3条件。練習前後の録音音声は、日本人英語教師3名が評価した。評価の視点は、発音・アクセント・ポーズの正確さをそれぞれ5点満点で採点した。スコアは $\alpha$ 係数を算出し、信頼性を確認した。スコアの伸びは、教師指導がもっとも高く、ついでPC、自力の順となった。共同発表者:飯野厚、阿久津仁史、鈴木政造
28 学習意欲と自信の回復を目指す一連の音読指導—動機づけと集中力をどう維持させたか	単独	2008年8月9日	第34回全国英語教育学会東京研究大会課題研究フォーラム(問題別討論会)	音読指導の実践例および実践上の工夫、その成果について発表。文字と音声を結びつけることができない学生の実情を紹介し、こうした学生に対する基本的な音読指導のあり方について整理。丁寧かつ段階的な音読指導により、中学校検定教科書レベルの英文がなかなか音読できない学生を、洋画のTranscriptやCNNのシャドーイングの取組にまでどのように引き上げるのかを報告した。実践報告で得られたデータから、繰り返し読みの活動が学生の音読能力に有意な伸びが見られたことを報告した。
29 大学における英語基礎学力保障のための音読指導(コンピュータ・ネットワークを利用した指導実践事例)	共同	2008年8月12日	日本リメディアル教育学会第4回全国大会	文字を音声化する能力の遅れが英語学力の形成を妨げるという立場に立ち、文字を音声化する指導を徹底することにより、リスニング能力の向上を図ろうと試みた授業と、その効果に関する発表。イントラネットに設置した個人サーバから自作の学習支援用ホームページを配信し、学生はCALL教室から個人サーバにアクセスして学習をする。ホームページには英文が提示してあり、同時にモデル音声を聞くことができる。授業開始前にPre-testを、半期の終わりにPost-testを実施し、スコアの比較を行った。Pre-testのスコアで対象者を上位群・下位群にわけ、両者のスコアの伸びを分析したところ、上位群と下位群の間に交互作用(有意傾向)が確認できた。結果的にPost-testのリスニングテストでは上位群と下位群に有意な差がなく、クラス全体がほぼ同じレベルに達したことがわかった。共同発表者:鈴木政造・阿久津仁史
30 リメディアル教育における音声指導を中心とした英語授業実践—英検3級リスニング問題からCNNシャドーイングにいたるまで	単独	2008年10月18日	外国語教育メディア学会関東支部第121回(2008年)研究大会	中学校検定教科書の音読が困難な大学生を対象にし、英検3級レベルの平易な英文への取組をCNNや洋画のtranscriptの平行リーディングやシャドーイングへと発展させる授業プロセスを紹介した。リメディアル教育の対象となる学生は、文字を音声化する能力の習得が著しく遅れており、英文を解説してもらったりコーラスリーディングに取り組んだりしても、文字を目で追うことができず、結局何も学ばずに授業を終えることになっている現状を、実際のデータを提示して指摘した。こうした学生でも、audio-assisted repeated reading aloud(モデル音声を聞きながらの繰り返し音読)によりリスニングの理解力が上がることをデータの分析を通じて説明した。さらに、文字を音声化する技能を獲得した学生を対象にした発展課題の指導過程を説明した。その後、より難易度の高いテキストを与え、最終的には海外のニュース番組や洋画のtranscriptをシャドーイングする活動に取り組ませるまでの指導方法を解説。ワークショップ形式で参加していただいた大学の先生方にその効果を体験していただいた。
31 個人サーバを活用した学内e-learningシステムの構築(Developing and Utilizing the Teacher-made e-learning System — From Remedial to Intermediate Use.)	単独	2009年6月13日	外国語教育メディア学会関東支部122回(2009年)研究大会	本発表では、教員自身が設置した個人サーバにe-learning用ホームページを構築し、リメディアルから中級以上の英語授業に活用した指導事例を紹介した。一般的にe-learningシステム構築と言うと、数千万円かけて導入するもので、専門知識がないと無理であると思われがちである。が、ここ数年の間に5万円程度のデスクトップパソコンが1台あり、学内ネットワークに接続することさえできればサーバーとして教材配信をすることが可能となった。HTML(HyperText Markup Language)など、ホームページを作成する基礎的な知識があり、学内ネットワーク管理者の認証が得られれば、研究室のパソコンをサーバとして、自作のe-learningシステムの運用ができるということである。現在個人サーバに設置しているシステムには、お知らせ、掲示板、レポートアップロード、英検模擬試験の自動採点・集計、授業教材ダウンロード、音声や動画を使った教材のページ等を設置し、授業で活用したり自習用に公開する事例を紹介した。

32 英語音読評価に影響する要因－日米評価者の評価比較－ A Comparison of Evaluation of Reading Aloud Performances Between Japanese and American Informants	共同	2009年6月21日	大学英語教育学会 (JACET) 第3回関東支部大会	音読の評価については、いくつかの研究が評価項目を提示しているが、いずれも熟達度との関係を検証していない。本研究は、先行研究から代表的な音読評価項目を抽出し、日本人評価者とアメリカ人評価者による評価の関係を分析した。両者には高い相関が認められたことから、日本人評価者の評価の妥当性を検証した。日本人評価者の評価得点(単語の発音、ポーズ、イントネーション、ストレス)と対象者の熟達度に関して、構造方程式モデリング (Structural Equation Modeling)による分析を行った。単語の発音の正確さがポーズ、イントネーション、ストレスに影響し、さらに熟達度に影響を与えることがデータからわかった。この結果は、音読評価は学習者の英語学力を予測する一指標であるという知見を一部裏付けることとなった。共同発表者: 鈴木政造、阿久津仁史、飛田ルミ
33 使える英語時代の音声指導－英語基礎学力形成から応用に至る音声指導－	単独	2009年6月27日	国際教育研究所6月例会	英語を使えるようになるまでにはさまざまなプロセスがあるが、現在日本で英語を学ぶ学習者の中には、体系的な音声指導を受ける機会に恵まれない者ため運用へと進めない者が多い。こうした実態を踏まえ、基礎的な音声指導に関わる指導技術を紹介し、これをさらに難易度の高いテキストを使ったシャドーイング等の取組に発展させるプロセスを紹介した。
34 コンピュータソフトの音読評価、その妥当性の検証	共同	2009年8月5日	外国語教育メディア学会 (LET) 第49回全国大会 (流通科学大学)	ソフトウェア(Speak!)の産出する音読スコアの妥当性を検証した研究。先行研究から複数の音読評価項目を設定し、アメリカ人評価者4名と日本人評価者4名(合計8名)が行った評価と、Speak!の産出するスコアの相関を確認したところ、比較的高い相関が観測でき、ソフトウェアスコアの妥当性を検証した。さらに、Speak!の評価特性を検証するために構造方程式モデリングによる分析を行った。その結果Speak!のスコアに強い影響を与えているのは単語の発音に対してのみであった。このようなことから、ソフトウェアスコアは人間の評価と相関があるものの、評価の内容については限定的である可能性があることがわかった。共同発表者: 鈴木政造、阿久津仁史
35 ソフトウェアのチャンク提示法による速読訓練の効果	共同	2009年8月5日	外国語教育メディア学会 (LET) 第49回全国大会 (流通科学大学)	ソフトウェアにより英文チャンクの提示法を変えた場合、読速度と読解効率にどのような変化がでるかを検証した研究発表。通常授業を行う統制群に対して、長いチャンク区切りの提示法、短いチャンク区切りの提示法と2つの実験群を配置し比較した。分散分析(反復測定・混合計画)による分析の結果、どの群にも主効果はみられたが、特に短いチャンク区切りで提示した実験群において有意な伸びが観測できた。熟達度が上がるにしたがい、長いチャンクで区切るようになるという経験的な予測に反して、比較的高い熟達度が高い学習者に対しても、短いチャンクで区切り、英文の統語的な側面に対して意識付けをする指導が、読速度や読解効率の向上には効果的であることがわかった。共同発表者: 神田明延、湯舟英一、田淵龍二、鈴木政造
36 英語音読評価と熟達度の関係に関する研究－プロゾディー、音読速度および精度からなる音読モデルの検証	共同	2009年8月8日	全国英語教育学会鳥取研究大会	音読評価項目と熟達度の因果関係について検証した研究。プロゾディー(ポーズ・ストレス・イントネーション)・音読速度・音読精度の3項目と学習者の熟達度をもとに、構造方程式モデリング (Structural Equation Modeling)による分析を行った。その結果、音読精度と音読速度がプロゾディーを通じて熟達度に影響を及ぼすことがわかった。さらに、プロゾディーの部分にポーズ・ストレス・イントネーション得点をそれぞれ当てはめた結果、ポーズ・ストレスは熟達度に影響を与えているが、イントネーションの影響は確認できなかった。その原因としては、イントネーションに対する評価者の評価は印象にとどまっており、明確な評価が難しいためであると考察した。共同発表者: 鈴木政造、阿久津仁史
37 音読評価項目とその関係に関する研究－日米評価者の評価比較	共同	2009年8月20日	関東甲信越英語教育学会第33回埼玉研究大会	日本人評価者の英語音読評価に関する妥当性を検証した研究。アメリカ人評価者4名と日本人評価者4名が大学生の録音音声を複数の評価項目(単語の発音の正確さ、プロゾディー)について評価し、音読速度および熟達度との関係を分析した。日米評価者の間には極めて高い有意な相関があった。また、アメリカ人評価者の評価とくらべ、日本人評価者の評価の方が有意に厳しいことがわかった。さらに日米評価者の評価特性に違いがあるかを検証した。単語の発音の正確さと音読速度がプロゾディー形成に影響を与え、さらにプロゾディーが熟達度に影響を与えるモデルを作成してデータを投入した結果、日米評価者の評価にはほとんど違いが見られなかった。これにより、あらためて日本人評価者の評価の妥当性が検証できた。共同発表者: 鈴木政造、阿久津仁史



38 知能特性に応じた指導法が学習意欲に与える影響— 大学生の英語学習に対する多重知能理論適用の可能性—	共同	2009年9月6日	大学英語教育学会 (JACET)2009年度第48回全国大会 (北海学園大学)	個人に応じた授業を進めるために、アメリカの心理学者 Howard Gardner が提唱する多重知能理論 (MI理論) を応用した英語授業が、学習者の学習動機にどのような影響を与えるのかを検証した。MI理論では、人間には8つの知能特性があり、顕在化しているものと潜在的に眠ったままのものがあるが、その両方を伸ばすことが教育の目的であるとする。本研究では、学習者の知能特性を測定する Inventory sheet を使用し学習者の知能特性を予測した。音楽的知能が比較的高いクラスには洋楽やリズムを多用した授業を行うなど知能特性に応じた授業を実施した。その結果学習意欲に関して事前調査と事後調査の間に有意な伸びを示した項目が認められた。また、Inventory sheet は複数の学部にもたがって実施したことから、学部間の知能特性の違いについても分析した。その結果、学部間で有意な差が認められた。共同発表者: 恒久真佐、阿久津仁史、鈴木政浩
39 リメディアル英語教育におけるシラバス作成に関する一試案	単独	2009年9月6日	大学英語教育学会 (JACET)2009年度第48回全国大会 (北海学園大学)	近年リメディアル教育の重要性が叫ばれており、実際勉強の仕方 (学習技能・方略) を指導しなければならない学習者が増えていることも指摘されている。英語教育に関して言えば、学習技能や方略を十分習得していないことが、学力低下に拍車をかけていると思われる。こうした状況に鑑み、学習技能の習得と習得状況の確認を積み重ねながら半期のシラバスを構築する視点を提案した。講義等で得た知識は概してテストやレポートに結実した後忘れることが多いが、定着した学習技能は他の授業や学習活動に引き継がれることが知られている。本発表では、こうした技能習得を教材の学習と組み合わせて毎回の授業を構成し、その蓄積により知識と学習技能の両方を定着させることを目指したシラバス作成のあり方を提起した。
40 中学校における音読指導: Fluency 指導とインタラクティブな音読指導のあり方 / 音読評価の一試案とパソコンソフト Speak! を活用した音読指導と評価	単独	2010年3月27日	第16回中学校高校教員のための英語教育セミナー (外国語教育メディア学会関西支部 中学高校授業研究部会主催) テーマ: 音読指導	教科書の一斉読みという音読指導の概念を一步進め、読みにおける流暢さ (fluency) 研究の知見を踏まえ、インタラクティブな音読指導のあり方についてまとめた。単語の発音 (word recognition) に関わる技能とその指導、ストレス・ポーズ・イントネーションなどプロディーに関わる技能の指導のあり方、画像や動画、BGM を使った音読発表の方法や、その評価の仕方について、これまでの実践事例をふまえてまとめた。さらに音読評価を簡便にするコンピュータソフトウェア Speak! の機能と評価の仕方について紹介した。
41 洋画のセリフを朗読するための音声指導アラカルト	単独	2010年6月28日	外国語教育メディア学会関東支部 音声・映像研究研修部会	Reading における Fluency 研究の視点から、音声指導のあり方を提案し、洋画のセリフを使った音読指導やシャドーイング指導の方法を紹介した。音声指導の目的として、語認識や decoding skills の形成、統語能力や内容理解を進めるための音読の方法、リーディングだけでなくリスニング能力を伸ばす点を紹介した。こうした考え方にもついで洋画のセリフを音読教材とするプロセスと指導法をまとめた。熟達度別に指導の方法を変えること、特に英検4級レベルの学生に対して洋画のセリフを教材化する上での注意点や、パソコンソフトやICレコーダーを活用して学生の音読能力と学習動機を高める指導を紹介した。
42 インタラクティブな音読指導 (単語レベルからシャドーイング指導まで)	単独	2010年8月4日	外国語教育メディア学会 (LET)50周年記念全国研究大会	音読の活動では聞き手を想定することが重要である。こうした視点に立ち、読みにおける流暢さ (fluency) 研究の知見を踏まえ、インタラクティブな音読指導のあり方についてまとめた。単語の発音 (word recognition) に関わる技能とその指導、ストレス・ポーズ・イントネーションなどプロディーに関わる技能の指導のあり方、画像や動画、BGM を使った音読発表の方法や、その評価の仕方について、これまでの実践事例をふまえてまとめた。
43 語認識自己診断能力と英語熟達度との関係 — 単語リストを使った英検合格予測の試案 —	共同	2010年8月7日	全国英語教育学会大阪研究大会	リストに示された単語の発音がどの程度わかるかで、英検の級別合格予測が可能かどうかを検証した。対象は大学1年生であった。英検長文問題に使用されている単語を無作為に抽出し、3級・準2級・2級の単語リストをそれぞれ複数用意した。これらのリストに示された単語の中で発音のわからない単語の個数と意味のわからない単語の個数を記録した。各級ともに複数のリストを用意し、どのリストを使っても結果に有意な差がないことを確認した。意味のわからない単語は、発音のわからない単語のおよそ1.8倍であった。この結果と英検の模擬試験のスコアを比較したところ、リストに示された発音のわからない単語の個数がおよそ3%以下の対象者は合格圏内であることがわかった。同様の調査を複数回実施したが、結果が同じであったことから、単語の発音がどの程度わかるかで英検の合格予測がある程度可能になると結論づけた。共同発表者: 鈴木政浩、飛田ルミ

44 音読がリスニング能力に与える影響－Warm-up Effectの検証－	共同	2010年8月21日	関東甲信越英語教育学会第34回茨城つくば大会	第2言語習得理論では、読速度の向上を妨げるなどの理由から音読活動の効果は過小評価されている。しかし、読解に困難を抱える学習者を対象としたreading fluency研究の領域では、音読がリーディングの能力を向上させるという見解が多い。また、リスニングにおいても音読の効果を認める研究が散見できる。さらに、脳科学の分野では、音読は脳の血流を活発にし、warm-upの役割を果たす効果があるとも言われる。本研究は、リスニングに対して外国語についても同様の効果が期待できると考え、直前の音読がリスニングテストに効果を及ぼすことを検証した。等質な2クラスで、片方のクラスには音読後リスニングテストを、別のクラスにはCDの音声聞かせた後リスニングテストを実施した。分散分析(混合計画)により実施したリスニングテストの平均値にどのような違いがみられるかを検証した。その結果、両群のデータに交互作用がみられ、音読した後リスニングテストに取り組んだ群の方が有意にスコアが高いことを確認した。共同発表者:阿久津仁史、 <small>あきつ ひとし</small>
45 洋画のモノログシーンを使った音読とシャドーイングの実践	単独	2010年9月26日	映画英語教育学会東日本支部9月例会	大学英語教員を対象としたセミナー。洋画のモノログシーンを音読教材として取り上げ、どのようなプロセスで指導を進めるかをまとめた。まずフランス語のテキストと音声を使い、単語の発音を正確に身に付けて自動化することがいかに難しいかを参加者の方々に体験していただいた。さらに単語レベルの発音練習から、句・文レベルの音読練習へとつなげ、3分間続けて音読し続けることにより、オリジナル音声の速度が遅いと感じる体験もしていただいた。こうした練習を通じて、熟達度の低い学生でも洋画のモノログシーンを音読し、シャドーイングすることが可能になることを示し、録音した学生の音読音声を洋画のシーンに重ねて編集するソフトウェアの紹介や、静止画に音読音声を重ねてパワーポイントで電子紙芝居を作るプロセスなどを紹介した。
46 英語授業の「楽しさ」を構成する要因に関する研究 一	単独	2011年8月6日	関東甲信越英語教育学会第35回神奈川研究大会	英語教育の分野で楽しい授業とは何かに言及した研究に散見できるが、その内容について体系的に整理されているとは言えない。そこでこれまでに英語授業における楽しさに言及した論文・文献の中から楽しさに関わる内容を抽出し中高大学生を対象とした質問紙調査を実施した。因子分析の結果、楽しさには5つの要因があることがわかった(参加表現の楽しさ、言語文化的知識の楽しさ、教科書外の学びの楽しさ、熟達の楽しさ、多様な学びの楽しさ)。
47 CALL教材を利用したチャンク単位での音読訓練が読解速度と読解効率に与える影響 The Effect of Read-aloud Training by Chunking on Reading Speed and Efficacy in a CALL Software Environment.	共同	2011年8月6日	外国語教育メディア学会第51回(2011年度)全国研究大会	チャンク(フレーズ)ごとの音読指導は内容理解を促進するという知見にもとづき、チャンク音読の練習が読解効率(読速度×読得点)にどのような影響を与えるのかを検証した。大学生を対象とし、チャンクごとに英文と音声を提示するコンピュータソフトを活用した音読練習を半期実施した結果、チャンク音読は読解効率の伸びに貢献しており、主として読解速度に影響を与えていた。チャンク音読は読速度を向上させ、これが読解効率を押し上げる主な原因である可能性を示唆した。共同発表者:神田明延、湯舟英一、田淵龍二、池山和子・山口高嶺、鈴木政浩
48 英語授業の「楽しさ」を構成する要因とその相互作用に関する研究－英語授業学研究からのアプローチ	単独	2011年8月20日	全国英語教育学会第35回山形研究大会	本研究の目的は、英語授業における楽しさの要因に対する評価が熟達度にどのような影響を与えているかを分析することである。質問紙調査により楽しさの要因は5つあることがわかっている(参加表現の楽しさ、言語文化的知識の楽しさ、教科書外の学びの楽しさ、熟達の楽しさ、多様な学びの楽しさ)。同じ質問紙を一部改訂し、楽しい授業を過去に受けた経験の度合いについて、大学生を対象とした調査を実施した。楽しさの5要因の経験度得点が大学生の熟達度にどのような影響を与えているかを検証するために重回帰分析を行った。その結果、楽しさの5要因に対する経験度得点すべてが熟達度に強い影響を与えているとは言えず、楽しさが学力形成につながっていないという知見を支持する結果となった。

49 学習者の自尊感情を重視した－Humanistic Approachによるコミュニケーション活動－	共同	2011年8月20日	全国英語教育学会第35回山形研究大会	Moskowitz(1978)は、外国語を学ぶことを通じて学習者の自尊感情を重視するHumanistic Approachによる授業づくりを提唱した。本発表では、Moskowitzの手法を大学の英語授業に適用した実践事例を紹介した。肯定的な形容詞のリストから、グループ内の仲間に向けてはまるものを選び、相手の印象を口頭で伝える活動や、学生が選んだ色のイメージから、仲間の肯定的な印象を思い浮かべて伝えるなどの活動に取り組んだ。その結果、「自分の知らない側面に気付かせてもらい、嬉しかった」「もっと自分のよさを知りたいと思った」「日本語だと言いくいけれど英語だと言いやすい」「言われた通りの自分になるようがんばろうと思った」など前向きな感想が寄せられた。また、Humanistic Approachによる授業と通常の授業後実施したアンケート調査によれば、「考える活動とグループの活動の両方がある英語の授業は楽しい」という質問項目に有意な伸びが見られた。これに加えて、MI inventoryの質問項目では、内省的知能に関わる項目について有意傾向であるが伸びが認められた。Humanistic Approachは参加表現の楽しさ要因、特にグループの活動と思考する活動の両方に影響を与えてくる可能性を示唆した。共同発表者：飛田ルミ・阿久津仁中・鈴木英語教育学大系第11巻『英語授業デザイナー－学習空間づくりの教授法と実践』をベースに、コミュニケーションの生成過程、その前後の世界の動きについて概観した。日本でコミュニケーションが重視された際、コミュニケーションにおける言語観が切り離されたことが問題であるとした上で、教室内のコミュニケーション活動にリアリティーを持たせること、そのための指導法としてHumanistic Approachが重要であることを提起した。日本の英語教育の分野ではコミュニケーション重視と言語観が結び付いていないこと、結果的に「会話表現(買い物会話等)」が中心となってしまう、これが英語学力の低下をもたらしたという主張につながったのではないかと分析をした。教室内におけるコミュニケーション活動には、教室環境ではリアリティーが必要であり、教室内の友だち同士の人間関係を構築し発展させることをリアリティーととらえ、リアリティーを活かした指導法の一例としてHumanistic Approachを挙げ、その実践例と成果を報告した。
50 国際化に対応した英語教育－ コミュニカティブ・アプローチの問題点と課題－	単独	2011年10月22日	国際教育研究所第15回座談会	過去の楽しい英語授業の経験度と英語学力との関係をアンケート調査を元に考察した。英語学力が比較的高いと考えられる学生とそうでない学生を比較し結果、学力が高いと考えられる学生は過去に「安心して参加できる」「内容がよくわかる」楽しさを有意に多く経験していることがわかった。さらに「わかる楽しさ」「より深く知りたいと思う楽しさ」「成長する楽しさ」に対する評価が高かった。この結果から、学力格差の背景には、「安心して参加できる楽しさ」や「内容がよくわかる楽しさ」が強く関係している可能性があるとした。
51 熟達度から見た楽しい英語授業に対する大学生の評価と経験度の違い	単独	2012年3月10日	日本リメディアル教育学会関東甲信第1回研究大会	英語学力向上のためには、英語嫌い、英語に対する苦手意識の克服が必要である。そのためにはまず、学習者の望むよい英語授業とは何かを明らかにする必要があるという視点で、学習者(中高大学生)を対象とする80項目からなる質問紙調査を実施した。データを因子分析にかけたところ、3つの要因が抽出された(授業内指向要因、授業外指向要因、授業成立要因)。このことから、学習者の考える望ましい英語授業には3つのタイプがあることがわかった。授業内指向要因は、授業者と学習者の関係性や、授業者の授業準備に関わる項目を含み、授業内で完結する授業のタイプであった。授業外指向要因は、学習者同士の関係性、異文化や多様性に対する認識や、世界で起きている社会問題に関わる教材を取り上げたり、学習目的に関わる項目を含んでいた。授業成立要因は、授業規律や多様な学びなどに関する項目を含み、一般的に行われている授業のタイプであった。
52 学習者から見るよい英語授業の要因に関する研究	単独	2012年6月10日	大学英語教育学会(JACET)関東支部大会	望ましい英語授業の要因における2つの要因(授業内指向要因・授業外指向要因)と英語授業に対する楽しさの印象の関係を分析した(中高大学生を対象とした質問紙調査のデータを使用)。授業内指向要因よりも授業外指向要因の方が楽しさの印象との関係が強かった。授業外指向要因に含まれる項目は、学習者同士の関係や教室の外を志向し、学習者は難易度が高いと考えているため、楽しさとの結びつきが強いと分析をした。共同発表者：鈴木政浩、三沢渉
53 望ましい英語授業の要因と英語授業の楽しさの関係に関する研究	共同	2012年8月18日	関東甲信越英語教育学会第36回群馬研究大会	

54	年齢の差が望ましい英語授業の要因評価に与える影響	単独	2012年8月28日	日本リメディア ル教育学会第 8回全国大会	中高大学生を対象とした質問紙調査により、望ましい英語授業と授業の楽しさ・勉強の好き嫌いの関係を年齢別に分析した。全体の傾向は次の3点であった。(1)英語の授業が楽しいと感じるほど英語の勉強が好きだと感じている(2)望ましい英語授業に関する2つの要因(授業内指向要因・授業外指向要因)の中には、授業の楽しさに直接影響を与える項目と間接的に影響を与える項目があった(3)授業内指向要因の評価が高く、日本人学習者の内向き志向を反映している。年齢別比較の結果は次の2点であった。(1)望ましい英語授業に対する評価は高校が最も低い(2)年齢が低いほど授業内指向要因が楽しさに影響を与え、年齢が上がると授業外指向要因が楽しさに影響を与える。授業づくりに際しては、年齢に応じて望ましい英語授業の観点を変えることが必要であった。
55	英語コミュニケーション、楽しいだけでよいのだろうか	共同	2012年8月28日	日本リメディア ル教育学会第 8回全国大会 (立命館大学) 企画「英語リメ ディアル教育; 私はこう考える ー基礎学力向上 と学習意欲の 改善ー」	学会全国大会シンポジウム企画。大学では中学や高校での基礎学力を十分に習得できていない学生が多く、リメディアル教育の必要性が論じられ実践が進んでいるが十分な成果が上がっているとは言えない。この企画では基礎学力向上と学習意欲を向上させるために、4名が個々の立場から提案を行った。英語授業におけるリメディアル教育では楽しさを重視することもある。そのため動きのある授業を想定しがちであるが、学習者は別のところで楽しさを求めており、楽しさの質を問いただす必要があると提案した。学習者が考える参加表現の楽しさ要因には、ペアやグループの活動以外に、じっくり考えたり表現したりする楽しさが含まれていた。このように思考や表現に関わる楽しさにも目を向けて授業を構築することが学力につながる楽しさであると結論づけた。共同発表者:清田洋一、牧野眞貴、鈴木政浩、石井研司、平野順也
56	チャンク音読が読解効率に与える影響	共同	2013年6月8日	外国語教育メ ディア学会 (LET)関東支 部130回(2013 年度)研究大 会	英文をチャンクごとに区切り音読することにより読解効率(読速度×読得点)がどのように向上するかを検証した。大学生を対象とし、チャンク音読群とチャンク黙読群で効果の比較を行った。いずれの処遇でも読解効率は伸びたが、チャンクに区切る能力が高い学生は特に伸びが顕著であった。チャンクに対する意識づけや説明が処遇の効果をより高める可能性を示唆した。共同発表者:鈴木政浩、神田明延、湯舟英一、山口高嶺、田淵龍二、池山和子
57	望ましい英語授業と楽しさの要因の関係ー英語授業学 研究の視点からのアプローチー Relationships between Factors of Preferable Teaching Practice and Enjoyment of Learning English in Classroom	単独	2013年6月16日	大学英語教育 学会関東支部 大会	学習者は望ましい英語授業と楽しさの要因は重なりと 考えているかどうかを検証した。望ましい英語授業と 楽しさの要因に関する質問項目を統合し、中高大 学生を対象とした質問紙調査を実施した。その結果、望 ましい英語授業と楽しさの要因は別の因子に分かれた ことから、両者は重ならないと学習者が考えている可 能性があることがわかった。また、楽しさの要因は5つ あることがわかっているが、その中で参加表現の楽しさ 要因には、以前の調査とまったく同じ質問項目が含ま れた。この結果は、楽しさの5要因のうちこの要因の再 現性が高く、学習者によって意見が分かれない可能性 を示唆した。
58	教室内指向要因と参加表現の楽しさの関係ー英語授 業学研究の視点からみる望ましい英語授業の枠組ー Relationship between the Factors of Preferable Teaching Practice and Enjoyment of Expression and Participation	単独	2013年6月29日	第43回中部地 区英語教育学 会富山大会	望ましい英語授業の要因の1つである授業内指向要 因が、楽しさの要因にどのように影響を与えるのかを 検証した。中高大学生を対象とした質問紙調査の データの中から、授業内指向要因と楽しさの5要因に 関する質問項目を抜き出し、前者が後者にどのように 影響を与えるのかを確認するために重回帰分析を 行った。その結果、授業内指向要因から楽しさの5要 因に与える影響はどれも高いとは言えなかった。学習 者は授業内指向型英語授業が楽しさにつながると漠 然と考えてはいるが、どのようにつながるのかは明確に 意識しておらず、授業者の手腕が問われる可能性を 示唆した。
59	チャンク単位の音声と文字の同時提示後の一斉音読が wpm・読解スコアに与える影響	共同	2013年8月8日	外国語教育メ ディア学会 (LET)第53回 (2013年度)全 国研究大会 (文教学院大 学本郷キャン パス)	チャンク単位の音読指導がリーディング能力の向上に どのような影響を与えるのかを検証した。チャンク単 位で英文と音声とを提示するソフトウェアを使用し、大 学生 の読解効率(読速度×読得点)の伸びを分析した。 チャンク音読により読速度の有意な上昇により読解効 率の伸びに寄与しているという従来の知見が確認でき た他、学習者の英語に対する学習姿勢も読解効率に 影響している可能性を確認した。対象者のうち英語の 勉強が好きなのは、3回の測定のうちまず読速度が顕 著に伸びたが読得点が下降した。しかし3回目の測定 では読得点も有意に伸びていた。英語の勉強が好き な群はまず音声面での能力が伸び、これが長期的な 練習の結果読得点の伸びにつながると分析した。共 同発表者:山口高嶺、神田明延、湯舟英一、田淵龍 二、池山和子、鈴木政浩

60 望ましい英語授業の構造と楽しさの要因の関係－英語授業学研究的視点からのアプローチ	単独	2013年8月22日	関東甲信越英語教育学会第39回研究大会	学習者が考える望ましい英語授業には授業内指向要因(T-S Communication型英語授業)と授業外指向要因(S-S Communication型英語授業)があり、前者は後者に移行すること、その仲立ちとして楽しさの5要因(参加表現の楽しさ、言語文化的知識の楽しさ、教科書外の学びの楽しさ、熟達の楽しさ、多様な学びの楽しさ)が存在するという仮説を検証した。中高大学生を対象とした質問紙調査のデータを共分散構造分析にかけた結果、学習者は次のように考えている可能性があることがわかった。(1)T-S Communication型英語授業は楽しさの要因をふまえた授業に移行しやすいこと(2)楽しさの要因をふまえた英語授業はS-S Communication型英語授業につながりにくい(3)特に熟達の楽しさはS-S Communicationにつながらない。この結果から、楽しさの要因をふまえた望ましい英語授業の枠組を提案した。
61 参加表現の楽しさ要因をふまえた望ましい英語授業の枠組(英語授業学的視点からのアプローチ)	単独	2013年8月28日	日本リメディアル教育学会(JADE)第9回全国大会	望ましい英語授業の要因と参加表現の楽しさの関係を検証した。これまでの研究から、楽しさの要因は5つ確認されており、その中で参加表現の楽しさ要因がもっとも安定している可能性があるとした。また、望ましい英語授業にはT-S Communication型英語授業とS-S Communication型英語需要があり、前者は後者に移行すると学習者は考えていることがわかっている。その際参加表現の楽しさが仲立ちとなっているという仮説を検証した。中高大学生を対象とした質問紙調査のデータ分析の結果、学習者は、楽しさの要因がS-S Communication型英語授業にはつながりにくく、特に「ペアの会話練習」はまったくつながらないと考えている可能性を示唆した。この結果から楽しい英語授業を楽しく終わらせず、S-S Communication型英語授業につなげる工夫をすること、特に会話練習には指導上の工夫がかなり必要であると提案した。
62 英語学習に対する不安軽減要因が学習意欲におよぼす影響についての検証(初期的研究報告として)	共同	2013年8月28日	日本リメディアル教育学会(JADE)第9回全国大会	学生を英語の勉強に向き合う気持ちにさせる要因は何かを探索した。自立した学習者を育てるには学習方略の指導が重要であるとされるが、これらはすでに学習動機がある程度形成されている学習者を対象としていることが多い。しかし、英語の勉強に対する不安や苦手意識を強く抱えている学習者を対象とした英語授業では、学習者の学習に対する不安意識を取り除くことが求められている。大学1年生を対象とした質問紙調査の結果、次のような意識を持っていることがわかった。(1)英語の授業が楽しく勉強が好きになるためには学習方略の習得が必要である(2)英語の勉強をしようという気持ちを起こすためには、学習方略の指導の影響はほとんどなく、活動内容(役立つ、興味を持てる)や授業内容(面白さ、学習内容の難易度と量の適切さ)が関係している。リメディアル英語教育においては、学習方略の指導に加え、活動内容や授業内容の調整が鍵の1つになることを提案した。共同発表者: 鈴木政造、牧野眞貴、石井研司、平野順也
63 学齢が楽しさおよび望ましい英語授業の要因の關係に与える影響－英語授業学研究的視点からのアプローチ	単独	2013年9月20日	日本教育工学会第29回全国大会	中高大学生を対象とした質問紙調査により、望ましい英語授業と授業の楽しさ・勉強の好き嫌いの関係を学齢別に分析した。全体の傾向は次の3点であった。(1)英語の授業が楽しいと感じるほど英語の勉強が好きだと感じている(2)望ましい英語授業に関する2つの要因(授業内指向要因・授業外指向要因)の中には、授業の楽しさに直接影響を与える項目と間接的に影響を与える項目があった(3)授業内指向要因の評価が高く、日本人学習者の内向き志向を反映している。学齢別比較の結果は次の2点であった。(1)望ましい英語授業に対する評価は高校が最も低い(2)学齢が低いほど授業内指向要因が楽しさに影響を与え、学齢が上がるほど授業外指向要因が楽しさに影響を与える。授業づくりに際しては、学齢に応じて望ましい英語授業の観点を変えることが必要であるとした。
64 英語授業の楽しさが望ましい授業の要因に及ぼす影響(英語授業学研究的視点からのアプローチ)	単独	2013年12月7日	日本リメディアル教育学会第3回関東甲信支部大会	望ましい英語授業の2要因(授業内指向要因・授業外指向要因)と英語授業における楽しさの印象との関係を分析した(共分散構造分析)。授業内指向要因よりも授業外指向要因の方が楽しさの印象との関係が強いことから、授業内指向型の授業が授業外指向型の授業に移行する際、授業における楽しさが橋渡しをするという仮説を設定した。中高大学生を対象とした質問紙調査のデータからは次の2点がわかった。(1)授業内指向要因は授業内指向要因に強い影響を与える。つまり、前者は後者に移行するものであると学習者はとらえている可能性が高い(2)授業内指向要因が授業外指向要因に与える影響とは逆に、楽しさの印象は影響を与えているとは言えない。現在行われている英語授業における楽しさは、授業内指向要因を重視した授業が授業外指向要因を重視した英語授業に移行する際、あまり役割を果たしていないと結論づけた。

65	楽しさの要因をふまえた望ましい英語授業の枠組	単独	2014年8月18日	日英言語文化学会(AJELC)第46回例会	質問紙調査をもとに、学習者が望む英語の授業と楽しさとの関係をまとめた。学習者が望む授業には、授業者が主体となって進む授業と、学習者が主体となって進む授業の2つの枠組がある。楽しさを中心とした授業は、授業者主体の授業が学習者主体の授業に移行する際の橋渡しをしている。しかし、生徒学生の感覚では、楽しい授業は楽しさでとどまっており、生徒学生中心の授業にはつながっていない。現在行われている楽しい授業には限界があり、学習者主体の授業に移行するように進めることが必要であると主張した。
66	英語学習に対する学習負担軽減のための方策	共同	2014年8月22日	日本リメディアル教育学会第10回全国大会	2013年度の調査結果は、英語学習の負担を軽減する要因として、活動内容の質と学習量の調整である可能性を示唆した。これを受け、中学・高校・大学の授業実践でどのような形で学習者の学習負担を軽減し、学習を継続させるのかを報告してもらった。単語テストの実施方法や到達目標の調整、語順の適切な認識方法と文節区切りにおける注意点、学習者の個性や特性に応じた指導、ITを活用した指導など具体的に報告をした。共同発表者:鈴木政造、阿久津仁史、三沢渉、小原弥生、恒安眞佐、中村紘子
67	英語授業の楽しさが学習負担軽減要因に与える影響(楽しい授業はどのようなやる気を引き出すのか)	単独	2014年8月22日	日本リメディアル教育学会第10回全国大会	2013年度の調査から、学習負担を軽減する要因をいくつか提案したが、これらの要因と授業の楽しさがどのような関係にあるのかを考察した。共分散構造分析の結果、授業が楽しければ勉強の仕方を知りたくなる可能性があることがわかった。勉強が苦痛であると考えられる学習者に対して楽しい授業を展開する中で、勉強の仕方を教えることが、学習を継続させることにつながる可能性があることを示唆した。
68	リメディアルを越えるリメディアル英語教育実践のあり方	共同	2015年8月22日	日本リメディアル教育学会第11回全国大会	リメディアル教育とえば、学力定位の学生に対して中高のやり直しを進める教育であることが多い。本発表では、学力低位であることを理由に取組内容の難易度を低く設定するのではなく、高等教育だからこそ可能となる仕切り直しの教育をリメディアル英語教育と位置づけた。音読やチャンツの指導、読み聞かせ、プレゼンテーションなど音声を中心とした授業、ITや文系指導、多様な学力レベルに対応した授業のあり方などについて実際の授業の流れや成果について交流した。共同発表者:浅野享三、鈴木政造
69	リメディアル教育における国際交流の可能性(英語学力の差が留学に対する意識に及ぼす影響)	単独	2015年8月29日	日本リメディアル教育学会第11回全国大会『大会予稿集』	先行研究にもとづき、31項目からなる質問紙調査を実施し、大学生が留学に対してどのような意識を持っているのか、それが英語学力とどのような関係にあるのかを分析した。筆記テストのスコアが高い学生ほど、ほとんどの項目で平均値が高かった。しかし、スコアの高い学生とそうでない学生の間には、ランキングにおける違いがあった。スコアが高い学生は専門性を高めることを留学の意義として認める傾向があり、スコアが高くない学生は幅広く教養を高めることを留学の意義として認める傾向があった。こうした結果から、留学の目的を語学力向上に置くより前に、まず知見を広めることを目的とし、語学力の向上はそのあとの目的とするプログラムを用意する必要があると主張した。
70	英語授業学研究再考ー学習者が望む授業者主導型授業の枠組ー	単独	2015年11月28日	日本リメディアル教育学会第4回関東甲信支部大会(江戸川大学)『発表予稿集』p.24-25.	過去の質問紙調査の結果から、学習者が望む英語授業(望ましい英語授業)には、授業者主導型授業と学習者主導型授業の2つの枠組があることを仮説として提案した。本発表はこれらの枠組のなかで授業者主導型英語授業の低位範疇である、授業者の寛容さを活かした授業に関するモデルを構造方程式モデリングにより探索的に分析した。英語授業づくりの初期段階として、授業者は学習者をつぶさに観察し、気軽に交流できる雰囲気づくりをすることが学習を促進することにつながる必要性を主張した。
71	英語授業学研究再考(2)(授業者の寛容さと教科における専門性の関係)	単独	2016年3月22日	第8回日本リメディアル教育学会関西支部	過去に実施した質問紙調査の結果をもとに提案した共分散構造分析のモデルの一部から、望ましい英語授業づくりを進めるために授業者にはどのような資質が必要とされているのかを分析した。探索的な構造方程式モデリングの結果、学習者は授業者の寛容さと専門性を同列にとらえていること、授業者の専門的知識が授業づくりを支える要素となっていない可能性があることがわかった。
72	Webシステムを活用した学習が語彙学習方略に対する意識に与える影響	共同	2016年6月18日	外国語教育メディア学会(LET)関東支部第136回(2016年度春季)研究大会『発表要項』p.14-15.	Webシステムは学習の個別化を促進するというメリットがある反面、問題の難易度が適切でない場合飽きるというデメリットがある。本発表はシステムのインターフェイスと問題作成における難易度の調整をすることで、このデメリットを回避でき、語彙学習方略に対する意識を高めることができるかを調査した。事前事後の質問紙調査の結果、語彙学習方略に対する意識は有意に向上した。分析結果は、Webのインターフェイスの特徴と、難易度を混合させた作問方法が語彙能力が高まったと対象者に感じさせた可能性を示唆した。鈴木政造、竹口恵理子

73 英語授業分析の手法と展開1(量的研究を中心とした授業分析)	共同	2016年8月24日	日本リメディア ル教育学会第 12回全国大会 『発表予稿集』 p.47-52	本発表では、量的分析の方法に関して概観し、授業で得られたデータを分析する際の統計手法を採用できるのかをまとめた。6つの授業実践の概要とそこで得られたデータの内容を紹介し、採用することが可能な統計手法について説明した。まず採用する統計手法を決める場合、得られたデータでグラフを作成するのが有効であること、モデルを示すことでデータの解釈が容易になることを解説した。説明した統計手法は、t検定・分散分析・重回帰分析・因子分析・構造方程式モデリング・共分散構造分析であった。量的研究のメリットとしては、データから直接見えない事柄を可視化できる点が挙げられる。反面一般的な傾向が示されたとしても、授業分析や改善では個々の学習者の実状を分析する場合にはデメリットもあることを示した。本人担当部分は統計手法の解説とそのメリット・デメリットの説明。鈴木政造、中村絢子、平瀬洋子、川井一枝、安藤香織、望月好恵、金沢真弓、浅野亨三
74 英語授業分析の手法と展開2(質的研究、質的研究から量的研究へ)	共同	2016年8月24日	日本リメディア ル教育学会第 12回全国大会 『発表予稿集』 p.54-57	本発表では、質的研究に関する手法を紹介し、授業改善に役立てるべき視点を提起した。授業者の発話に関する談話分析、Thinking at the Edge(TAE)を用いた学習者の記述回答の分析を紹介した。これらの質的研究手法は、授業者および学習者の認知プロセスにフィードバックを与え、記憶・理解・適用・分析・評価・創造などの思考および気づきを促進する中で授業改善が進むことを示した。量的研究のみ質的研究のみではなく、質的研究で見える部分の分析を行い、分析結果を質問紙調査などの量的分析へとつなげるという循環がLearner DevelopmentやFaculty Developmentを促進することを提起した。本人担当部分は質的研究のメリットおよび質的研究と量的研究の併用と授業改善への適用の提案。鈴木政造、中西千春、城一道理子、壁谷一広、遠藤雪枝、阿部牧子
75 クラウド型e-learningの機能が語彙学習継続に与える影響(ARCS動機づけモデルの適用)	共同	2016年8月24日	日本リメディア ル教育学会第 12回全国大会 『発表予稿集』 p.78-79	本研究では、クラウド型e-learningのシステムによる学習を継続させるための配慮を提案した。語彙学習システム(Kojiro)を使用し、Kojiroのインターフェイスに搭載したアバターの使用期間の違いにより、語彙学習に対する学習者の印象がどのように異なるのかを分析した。Kojiroは授業者が自作した問題をそのまま使用することができるため、英検3級から2級の長文問題から単語を抽出した(難易度混合)。Kojiroの取組時期により2つの群を設定した(アバターを最初から最後まで使用した群<ありあり群>と、前半アバターなし、後半アバターありくなしあり群)。両群に対して事前事後で質問紙調査を行った。分析手法は重回帰分析を採用した。その結果、なしあり群では複数の質問項目が独立変数に投入されたが、ありあり群では2つの項目が投入されるにとどまった。このアバターの使用は短期的にはいくつかの学習動機を促進するが、長期的に使用することで語彙学習に対する内発的動機が促進される可能性を示唆した。竹口恵理子、鈴木政造
76 望ましい英語授業に関する質問紙作成のプロセス(質的研究から量的研究へ移行する手法の一事例)	単独	2016年8月24日	日本リメディア ル教育学会第 12回全国大会 『発表予稿集』 p.120-121	学習者が望む英語授業(望ましい授業)の枠組を仮説として提案するための質問紙作成までのプロセスとその後での量的研究までをまとめた。質問紙作成にあたり、望ましい授業に関連するキーワードを含む論文・書籍を集め、具体的記述部分を抜き出した。次に中高大学生を対象とした記述回答から望ましい英語授業を表す表現を抜き出した(文章完成法)。書籍・論文の記述部分と学習者の記述回答から得られたデータを統合し、ラベルを付与し分類して大まかな傾向を把握した。授業者・学習者の記述には共通する部分があったが、授業者の専門性に言及した記述はほとんど見られなかった。学習者は望ましい英語授業について具体的なイメージを持っておらず、自分の経験した授業の中から望ましくない授業とは逆の授業を望ましいと考えていること、また人格形成や人間形成に関連した記述がほとんど見られなかった。最終的に分類した項目を元に質問紙を作成し、調査の結果得られたデータを共分散構造分析によりモデルを作成し、望ましい英語授業の枠組を仮説として提起するまでを説明した。
77 英検3級レベルで始める海外ニュースサイト(CNN・VOA)の授業	単独	2016年12月3日	日本リメディア ル教育学会第 1回東北支部 大会(桜の聖 母短期大学)	本発表は英語を苦手とする大学1年生を対象にCNNやVOAなどのニュースサイトの英語学習に取り組むまでの指導手順を理論的背景を踏まえてまとめることを目的とする。学習者の学力レベルに合わせて一定期間オーバーラッピングに取り組む。次にフレーズ音読から速音読に取り組むことでニュースサイトの英語のオーバーラッピングができるようになる。この活動はリスニング能力の向上に即効性が認められる。当日はリスニングスコアの推移を元にその成果を確認するとともに、この活動の効果を技能の連動制という視点から考察を加える。

78 楽しさの視点から見る授業の振り返りとその量的研究への適用 A Reflective Analysis of Teaching Practice of English from the Viewpoint of Enjoyment and Its Application to Quantitative Research.	単独	2017年2月11日	『日本リメディア ル教育学会 第5回関東甲 信支部大会予 集』p.42-43. (神田外語学 院)	本発表は授業実践の振り返りを質問紙調査とその量的分析へとつなげるプロセスの一例を紹介することを目的とする。過去に中高大学生を対象とする英語授業における「楽しさ」の要因に関する研究を行った。学生の自由記述回答を質的に分析した上で質問紙調査を作成し、得たデータを確証的因子分析により分析したものである。調査の結果、楽しさの要因には5つあることがわかった。これをもとに楽しさの構造を提案するまでを整理した。
79 英語授業学の視点から日本人大学生の英語・英語学習に対する意識を分析する	共同	2017年2月11日	『日本リメディア ル教育学会 第5回関東甲 信支部大会予 稿集』p.26-27. (神田外語学 院)	本発表は、自己像形成の促進と英語授業の関係を英語授業学的な視点から分析する前段階の調査である。大学生を対象とした質問紙調査データで二次因子分析を行った結果、自己像形成に関わる項目と授業参加に関わる項目が同じ因子に含まれた。相関が高いものの、実用的な英語学習に関わる項目とは別の因子に含まれたことから、授業で形成される自己像は、授業学の英語の運用とは距離がある可能性を示唆した。望月 好恵, 鈴木 政造, 大和久 吏恵, 原田 祐貨, 中西 千春, 平瀬 洋子, 川井 一枝, 中尾 桂子, 壁谷 一広, 小山 貴之, 阿部 牧子, 遠藤 雪枝, 松本 由美, 原口 友子
80 チャンク長が英文読解能力に与える影響	共同	2017年6月17日	『外国語教育 メディア学会 (LET)関東支 部 第 138 回 研究大会 発表要項』 p.30-31.(関東 学院大学)	Reading fluencyには音読速度, 読速度, chunk長等が関わっているという研究がある。本研究は、リーディングにおける内容理解の得点がchunk長とどのような関係にあるのあを、音読速度, 読了時間をふまえて分析した。Readabilityの異なるテキストを3種類用意しchunk長・音読速度・読了時間・内容理解得点を計測した。主成分分析の結果はchunk長と内容理解得点とはあまり関係がない可能性を示唆した。難易度別にchunk長平均値を比較したところ, 最も高いreadabilityのテキストと最も低いreadabilityのテキストとの有意な差が認められなかった。難易度が高すぎる場合, 学習者は前置詞や接続詞等のchunking markersをたよりにchunk区切りをし, 内容理解にはchunkが役立っていないことを示唆した。共同発表者:鈴木政造, 神田明延, 湯舟英一, 山口高嶺, 田淵龍二
81 自己像形成意識と英語学習動機づけ要因の関係—英語授業学研究の視点から—	共同	2017年6月24日	第47回中部地 区英語教育学 会 長 野 大 会 (信州大学教 育学部)	本発表は、英語学習の動機づけの要因に対し、将来の自己像形成意識がどのように関わっているのかを分析し、これをもとに英語授業の枠組を提案すること(英語授業学)を目的とする。英語学習における動機づけには、従来の「道具的動機づけ」「統合的動機づけ」等の他、自己像形成に対する意識が学習動機に関わっているという研究がある。本研究では、過去の質問紙に自己像形成に関する独自項目を含めた57項目からなる質問紙を作成し調査を実施した。収集したデータに対しては確認的因子分析を行った。対象者は関東近県を中心とした全国の13大学に所属する1年生から4年生1159名、実施期間は2016年10月から12月であった。最終的に採用したのは2因子構造の二次因子分析のモデルであった。第1の因子は「英語学習に対する興味関心・将来の自己像形成意識・授業参加度」に関わる項目から構成された。第2の因子は「実用的英語学習・学習に対する負荷意識・学習努力意識」に関わる項目から構成された。適合度はGFI=.85, AGFI=.82, CFI=.88, RMSEA=.068であり良好とは言えないまでも許容範囲内と判断した。将来の自己像形成に関わる項目は、授業や英語学習に対する興味関心と同じ因子に含まれ、実用的英語使用と別の因子に含まれたことから、英語を運用することが自信につながる可能性が薄いことがうかがわれた。また、実用的英語使用に関わる要因は、学習に対する負荷や学習への努力に関する要因に含まれていた。この結果は英語を運用する経験には負荷や努力が伴うものであるという意識を対象者は持っている可能性を示唆したしかし、2つの因子の因子間相関は比較的高く、授業を通じて形成された将来の自己像形成意識が、実用的英語使用へと通じる可能性があることも示唆していた。鈴木政造, 阿部牧子



<p>82 海外選手との交流が英語学習努力意識に与える影響—英語授業学研究の視点から—</p>	<p>共同</p>	<p>2017年6月24日</p>	<p>第47回中部地区英語教育学会 長野大会 (信州大学教育学部)</p>	<p>本研究は、理想的第2言語(L2)自己像形成が英語学習努力意識にどのような影響を与えるのかを分析し、これをもとに英語授業の枠組を提案する(英語授業(信州大学教育学部)ことである。学習に関する動機づけ研究では、統合的動機づけに含まれる要素から理想的L2自己に関する要素を独立して設定する研究がある。第2言語を実際に使用する自己像を描けることが学習の動機づけに結びつくという考え方である。本研究は、英語学習に対する関心意欲や学習努力意識、および理想的L2自己形成に関する57の項目からなる質問紙を作成し調査を実施した。対象者は体育大学の学生20名であった。実施期間は2016年9月であり、海外の選手と交流する機会を得た直後であった。データ分析の方法としては英語学習努力意識に関する項目を従属変数に、その他の項目を独立変数とする重回帰分析を採用した。データ収集時に英検の過去問題(抜粋)を実施しており、スコアの上位群と下位群(それぞれ10名ずつ)で分析を行った。スコア上位群では「英語の授業の雰囲気が好き(.57)」「英語圏の国々に旅行したい(.80)」が独立変数に投入され、重相関係数の二乗(R<sup>2</sup>)は.69であった( )内の数値はパス係数)。スコア下位群は、「英語圏の国から来た人たちに会うのが好き(-.51)」「英語の授業の雰囲気が好き(.82)」「英語の勉強を楽しんでいる(.29)」が独立変数に投入された。重相関係数の二乗(R<sup>2</sup>)は.973であった。両群とも独立変数に「授業の雰囲気」が投入されたことから、対象者の学習努力意識は主として授業を通じて形成されていると考えられる。 下位群に関しては英語圏の人たちとの交流から生じるパス係数が負の値となっており、交流志向が学習努力につながらない傾向があることがわかった。望月好恵, 松本由美, 鈴木政浩</p>
<p>83 英文難易度の違いがチャンク長と読解能力の关系到及ぼす影響The Influence of Differences of Readability on the Relationship between Chunk Length and Reading Comprehension</p>	<p>共同</p>	<p>2017年8月6日</p>	<p>外国語教育メディア学会 (LET) 第57回全国大会 名古屋学院大学 名古屋キャンパス 白鳥学舎</p>	<p>Webベースの学習システムを使ったリーディングテストのデータ分析。埼玉県内の大学2年生83名を対象とし、収集したデータは、読了時間・得点・音読速度・リーディングの際のchunk長で、この4つのデータの関係を主成分分析により分析した。テストに使用した英文は、すべて語彙レベルとreadabilityを数値として算出し、これらも分析に使用した。分析の視点は、テキストの難易度と収集したデータの間にどのような関係が認められるかであった。分析の結果、学習者には次のような傾向がみられることがわかった。(1)英文の難易度が上がるほど単語を拾い読みするなど速度重視の読みとなること。(2)難易度が下がるほど精度中心にじっくり読む傾向があること。さらに対象者には、読む際のchunk長に関しては、統語的な特徴をもとにして区切るため、フレーズ能力が必ずしもリーディングに役立っていない傾向があることもわかった。読みの精度と速度のバランスをどのようにすべきかという課題を残した。鈴木政浩, 湯舟英一, 神田明延, 山口高嶺, 田淵龍二</p>
<p>84 体育系学部の英語授業で必要な指導の方向性について(非体育系学部との比較に基づく授業学研究の視点から)</p>	<p>共同</p>	<p>2017年8月22日</p>	<p>『日本リメディアル教育学会 第13回全国大会 発表予稿集』p.106-107 日本文理大学</p>	<p>英語学習動機づけにおける自己像形成の必要性について、体育系学部と所属する学生と非体育系学部と所属する学生の違いについて分析した。質問紙調査のデータを共分散構造分析にかけたところ、体育系学生はパフォーマンスに優れ、海外の人たちとやりとりする自分を想像しやすいが、反面学習に対する地道な努力については意識が高くない可能性を示唆した。望月好恵, 鈴木政浩, 壁谷一広, 大和久吏恵</p>
<p>85 学習方略定着を重視したシラバスとポートフォリオを統合した英語授業の一事例(英語授業学研究の視点から)</p>	<p>単独</p>	<p>2017年8月22日</p>	<p>『日本リメディアル教育学会 第13回全国大会 発表予稿集』p.106-107 日本文理大学</p>	<p>楽しさの要因をふまえた望ましい英語授業の枠組の第1ステージは「授業者主導の授業」である。ここには学習の短期もしくは中長期的な見通しを踏まえることと学習者の自律支援に関する項目が含まれている。そのため、ポートフォリオとシラバスの統合を試み、こうした授業を通じて学生の意識がどう変化するかを分析した。シラバスには習得すべき学習方略(スキル)が提示されており、学習者がスキルを獲得したことを授業者が確認しチェックを入れた。半期の授業が終了した後、当初は学習動機の低かった学生の方が、スキルの重要性に対する意識が有意に高まったことが確認できた。</p>
<p>86 リメディアル教育の現状と求められる授業者の資質(質的研究に見るリメディアル英語教育の実状)</p>	<p>共同</p>	<p>2017年8月23日</p>	<p>『日本リメディアル教育学会 第13回全国大会 発表予稿集』p.15-18 日本文理大学</p>	<p>記述回答による質問紙調査の結果を分析し、リメディアル教育に関して授業者が持つ意識やその資質について分析した。中高の学習をやり直すという視点から、動機づけ、目標の個別化、ディプロマポリシーをゴールにした基礎学力定着等多様な視点があることがわかった。リメディアル教育に関わる授業者の資質は、忍耐や寛容さなどの態度面の他、一般的な授業で求められる資質との違いがわかる回答が散見された。鈴木政浩, 中西千春, 川井一枝, 中尾桂子, 小山貴之</p>

87 リメディアル英語教育における授業者と学習者の意識 (量的研究に見るリメディアル英語教育の実状)	共同	2017年8月23日	『日本リメディアル教育学会 第13回全国大会 発表予稿集』p.31-34 日本文科大学 リメディアル教育に携わる授業者に求められる指導スキルについて質問紙を作成し、パイロットスタディーを行った結果報告。授業者の指導スキルについて自作の質問紙を作成した。質問紙にあるスキルの重要度について意識調査を行った。平均値に有意な差が認められた項目群が認められたが、顕著な傾向が見当たらなかった。今後は重要度に関する意識ではなく、実施度について調査を行う。また、同様の質問紙を学生を対象に実施し、授業者と学習者の意識にどのような共通点や相違点があるのかを分析するという課題を提起した。川井一枝, 中西千春, 中尾桂子, 小山貴之, 鈴木政造
88 自己像形成意識が「英語が好き」という意識に与える影響ー英語授業学研究の視点からー	単独	2017年11月18日	外国語教育メディア学会 (LET) 関東支部 第139回 (2017年度秋季) 研究大会 東洋大学川越キャンパス7号館 英語学習における動機づけには、当該言語を使用するコミュニティーに所属したいと考える統一的動機づけがある。これをさらに発展させ、理想第2言語自己像 (当該言語を使用する自分の姿を思い浮かべること) により生ずる学習意欲を動機づけ要因に含める研究がある。本論文は全国の大学生1163名を対象にした質問紙調査のデータを確認的因子分析により分析した。その結果から、実用的な英語学習を通じた自己像形成を促進することが求められるが、第2言語学習環境とは別の形で進める必要があることを指摘した。理想第2言語自己像形成の準備段階として、理想外国語自己像を想定し、日本の学習環境に合わせた自己像形成とそのための授業づくりの枠組と発展段階 (わかる自分→できる自分→英語を使う自分) について提案した。
89 すぐれた授業・よい授業とは何か?ー英語授業学研究の視点から	単独	2018年4月28日	国際教育研究所 月例会 第1部では英語授業学研究の捉え方や定義についての提案を行った。「すぐれた授業」「よい授業」をどうとらえるかは、授業者・学習者それぞれです。英語授業学とは「名人芸の一般化 (誰もがすぐれた授業づくりができる)」ととらえるとするならば、人によりまちまちなとらえ方を1つの枠組に仕立てる必要がある。本講演では、参加者から「すぐれた授業」「よい授業」とはどのようなものか、思いつくまま語っていただき、枠組をどう構築するかを互いに考えつつ、英語授業学研究とはどのようなものなのか交流を深めた。「楽しさの要因をふまえた望ましい英語授業の枠組」「理想EFL自己像形成のための枠組」など紹介した。
90 Webシステムを使った 語彙習得コンテンツ作成の試みー英語授業学研究の視点からー	共同	2018年8月23日	英語授業学研究 所月例会 語彙習得と音読指導は、本来英語習得にとってもっとも重要な領域であるにも関わらず長い間学習者任せとなっていた。音読指導に関しては海外では70年代から fluent readers 育成のために実践・研究が盛んであるが、国内では80年代後半から注目を浴びようになって久しい。語彙習得理論等については70年代以降内外で文献や研究が散見できるようになった。 具体的な指導法としては、接頭辞・接尾辞によるリスト、語源を活用した解説、カタカナ英語による理解、word family を使った語彙の増殖法等が提唱される。本発表ではこれまでに提唱された語彙学習の方法に加え、発音の類似点をヒントに語彙を増やす指導等について言及した。さらにこれらをもとに作成した語彙リストの一部を紹介し、学習と習得を促進するWebシステムへの組み込みの可能性についても言及した。鈴木政造, 竹口恵理子
91 英語借入語 (外来語) を活用した語彙リストの作成ー英語授業学研究の視点からみる語彙指導の発展過程ー	単独	2018年10月6日	英語授業学研究 所月例会 日本語における英語借入語を活用し、語彙サイズを増やすためのリスト作成の手順を提案し、作成した語彙リスト特徴 (語彙サイズ) 活用法と増殖可能な語彙数について報告した。 音読指導と並んで、語彙習得は英語学習に極めて重要な役割を果たす。しかしながら、これら2つの領域については長年学習者まかせにされてきたのが現状であり、これが英語学力格差を広げる原因となっていると思われる。 近年 Word Family を活用した語彙サイズの伸張の意義を主張する知見がある。Nation (2013) 他は、出現頻度上位 2000 語から 3000 語の見出し語とその word family の習得が重要であり、この語彙レベルをいかにクリアするかを考える必要がある。 しかし、中学レベルの語彙を十分習得していない学生にとって、採用できる見出し語 (headwords) には限りがある。 英語授業学研究では、楽しさの要因をふまえた望ましい英語授業の枠組を提案した。この枠組にもとづく語彙指導の発展過程を提案した。

92 英語借用語リストによる語彙指導	単独	2018年11月18日	英語授業学研究所月例会	本発表では、この語彙リストに他のリストから英語借入を抽出し約2000語の語彙リストを作成した。カタカナ語になっているため、発音指導を十分にすることで、中学生レベルの語彙学習につまづく学習者の語彙習得が進むことが期待できる。発表ではこの語彙リストを今後どのように発展させるかについても言及した。リストの語彙項目の派生語をリスト化しword familyを意識した語彙指導を行うこと等が考えられる。こうして作成した語彙リストをWebベースのシステムに移植し、e-learningによる語彙習得の可能性についても言及した。
93 望ましい英語授業の枠組における語彙指導の発展過程 英語借用語リストによる語彙リストの作成	共同	2018年12月23日		本発表は英語授業学研究で設定した「望ましい英語授業の枠組」を適用し、語彙指導を進める過程について議論することを目的とする。この枠組は、授業者主導型授業・楽しい授業・学習者主導型授業・英語を使いこなす授業の順に授業づくりを発展させることを想定している。まず望ましい英語授業の枠組について概観し、それぞれに過程で語彙指導をどのように展開するかを議論した。鈴木政浩, 南部匡彦
94 英語授業学における 語彙指導の枠組	共同	2019年2月18日	英語授業学研究所月例会	英語借入語はカタカナ語として日常生活でも接することができるはずだが、定着度には差が認められた。抽象度や対象者の生活経験などが影響していると考えられる。このデータをもとに、今後、既存の語彙リストを含め、定着の度合いを基準とした語彙リストの作成を進める。当日は語彙項目別の定着度の一覧等をもとに議論を進めた。鈴木政浩, 南部匡彦
95 すぐれた英語授業とは何か(質的研究)－英語授業学研究序章	単独	2019年3月16日	英語授業学研究所月例会	本発表は、すぐれた授業、理想とする授業が、高等教育機関の教員にどのように認識されているのかを分析することを目的とする。 すぐれた授業、理想とする授業、素晴らしい授業というような表現が使われることがあるが、その内容は百貨騒乱であり、定義として一定したものは多く見られない。そこで、先行研究に記された自由記述データを質的に分析した。 利用するデータは大学英語教育学会(IACET)授業学研究委員会編著(2007:316:319)における「70字で表す<理想とする授業>一覧」である。このデータをテキストマイニング解析ができるWebサイトとフリーのツールを使用して解析し、理想とする授業に含まれる要素について考察を加える。考察結果を踏まえ、これまで手作業で進めて来た改訂版 Ground Theory Approachの分析へと持ち込みたい。 また、複数のテキストマイニング関連ツールの出力結果を比較し、どのような特性があるのか、今後の研究に使用することが可能かどうかを分析する。